

第3回福島県浜通り等地域
行政と復興に関わるNPO等多様な主体の
活動の理解・連携連続交流会
ーきっかけ・つながりづくりー

榎葉会場（平成30年7月6日（金））

議事録

復興庁ボランティア・公益的民間連携班

議事次第

日 時：平成30年7月6日（金）9:30～

場 所：檜葉町保健福祉会館 1階 大会議室

1. 開会挨拶

復興庁ボランティア・公益的民間連携班 参事官 原田浩一

2. 事例発表①

認定NP0法人ふくしま再生の会 副理事長 菅野宗夫氏

3. 事例発表②

東松島市あおい地区会 会長 小野竹一氏

東松島市総務部市民協働課協働推進班 班長 難波和幸氏

4. 事例発表③

NP0法人アットマークリアスNP0サポートセンター 代表理事 鹿野順一氏

釜石市復興推進本部生活支援室 室長 山崎教史氏

（休 憩）

5. パネルディスカッション

6. 登壇者との意見交換（グループに分かれて2回）

7. 閉会挨拶

8. 交流会

○司会：それでは定刻になりましたので、ただいまから、復興庁ボランティア・公益的民間連携班、一般社団法人ふくしま連携復興センター、特定非営利活動法人ジャパン・プラットフォーム、東日本大震災支援全国ネットワークの共催、福島県、宮城県、岩手県、飯舘村、楡葉町、東松島市、釜石市の後援により、第3回福島県浜通り等地域「行政と復興に関わるNPO等多様な主体の活動の理解・連携連続交流会ーきっかけ・つながりづくりー ～行政とNPO等多様な主体との協働によるコミュニティ形成について～」を開会いたします。

私は、本日の司会進行を務めます、復興庁ボランティア・公益的民間連携班の金子と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

それでは始めに、共催団体を代表いたしまして、復興庁統括官付参事官ボランティア・公益的民間連携担当の原田浩一より、御挨拶を申し上げます。

○原田：おはようございます。復興庁の参事官をしております、原田でございます。

本日は、お忙しいところ、お集まりいただきまして、ありがとうございます。

本日は、浜通りにおける、行政とNPO等の多様な主体との間での交流会ということでございます。福島県の浜通りにおきましては、原子力災害の問題がございまして、順次、避難指示の解除が行われております。この交流会、昨日は飯舘村で行いまして、本日、楡葉町でございますけれども、飯舘村は平成29年3月31日に避難指示解除されておりますが、帰還されている方が、私どもの調査では、十数パーセントでございます。楡葉町におかれましては、平成27年9月に解除されておりますけれども、今年の5月末の時点で、四十数パーセントの方が帰還されているということでございます。そういった中で、楡葉町におかれても、帰還はまだ半数以下でございますし、飯舘村につきましては、まだ1割を超えたばかりでございます。帰還が始まったばかりという地域もありますので、これからが本格的な復興の始まりではないかと思っております。

そういった中では、ソフト面を中心とした、よりきめ細かな、創意工夫による対応が求められると思っております。こういった場面におきましては、行政のみならず、NPO法人等を主とする多様な主体間での連携・協働による取組が、ますます求められていくと感じているところでございます。今回の交流会につきましては、そういった行政、NPO法人の双方の話し合いのきっかけづくり・つながりづくりを目的にしているところでございます。

昨年度から連続的に行われておりまして、今回、3回目でございますけれども、1回目は、今年の1月に南相馬、いわき市、2回目は、3月に南相馬、広野町で行っております。2回を重ねる中で、これまで御参加いただいた方々からは、この交流会をきっかけに、地元の首長、役場と連携したいということを伝えまして、協働に向けて足掛かりになったということも聞いております。こういった交流会を通じて、きっかけづくり・つながりづくりとして、新たな動きができてきているのではないかと考えております。

本日の交流会でございますけれども、地元の福島、岩手、宮城の行政とNPOの方から、それぞれの事例発表をしていただくことにしております。その後、パネルディスカッションをし、更にその

後、参加者の皆様と発表された方々との間で、直接お話をする時間も設けているところがございます。本日は、特に社協の方々ですとか、実際に活動されているNPO法人の方々から多数御参加をいただいているところがございますので、御自身の地域の取組と重ね合わせながら、積極的に御質問をいただき、協働の在り方について深めていただければと思っております。

それでは、本日の交流会がきっかけづくりとなることを祈念いたしまして、私の御挨拶とさせていただきます。どうぞよろしくお願いいたします。（拍手）

○司会：それではここからは、認定NPO法人ふくしま再生の会、副理事長の菅野宗夫様による事例発表に移らせていただきます。菅野様、御登壇願います。よろしくお願いいたします。

○菅野氏：おはようございます。飯舘村からやってきました、菅野宗夫と申します。

私どもは、認定NPO法人ふくしま再生の会と申します。主な活動事例を発表させていただきます。座って、発表させていただきます。

私は飯舘村に生まれて、飯舘村で農業をやっておりまして、今回の震災、原発事故にあってしまいました。7人家族でして、昨年、解除になったわけでありすけれども、現在もまだ2世帯に分かれて避難生活をしながら、自分の家を中心に、事故直後から活動を継続してやっております。

（菅野資料1）この写真で見られますように、田園風景の周りに集落があって、四季折々の豊かさを感じながらずっと生活をしてまいりました。右下は、同じ場所からの風景でありますけれども、御覧のとおり、フレコンバッグの山です。飯舘村は800ヘクタールの田んぼがあるわけでありすけれども、そのうちの約300ヘクタールが、いまだにフレコンバッグの山である。昨年、解除にはなっていて、解除になれば即営農活動ができそうな感じですが、このようなフレコンバッグの山で、営農活動にはほど遠い状況が続いております。

飯舘村は6,000人の村であるのですが、現在約700人が帰還されたという報告がされております。厳しい状況であります。

学校の再開についても、現在104名の方々、保育園から中学校までの生徒たちが通っているわけでありすけれども、飯舘村内に戻って学校に行っている人は、わずか5人だけです。あとの99人は、飯舘以外、遠くは福島あたりから14のスクールバス路線で通っているというのが、現状の姿であります。

（菅野資料2）飯舘村は、皆さん御存じのとおりでありますけれども、阿武隈山系の中にあります。230平方キロという広大な阿武隈山系の400メートルから450メートルに、20の行政区がありまして、約4分の3が山林という状況で、現在、長泥地域を除いて解除になったということでもあります。

（菅野資料3）飯舘村は高冷地でありましたので、たびたび冷害に襲われてきた地域でもありますが、自然の恵み、農業が基本ということで、土づくりに邁進をして、経営の安定を図ってきたわけでありす。家畜の導入によりまして、土づくり、あるいは技術の向上も含めて、高冷地ならではの花卉栽培、高冷地の野菜などが、都会に販売がされてきた。牛については、今、飯舘牛

という、ブランド牛として位置付けもされてきて、これからというときでした。今後、飯舘は最後まで残るという気持ちでずっとやってきました。飯舘は、自然の恵みを目の当たりにしながらやってきた地域であります。

（菅野資料4）そういう地域の中で、私たちは以前から、コミュニティというか、地域づくりということで、全て自分たちの手でということで、環境整備に取り組んでまいってきております。ですから、平成の大合併のときも合併をしませんでした。行政サイドで合併を進めていても、こちらは合併をしても変わりがないのではないか、自分たちの地域は自分たちの手で守るのということで、上からなくせと言われても、なくす必要はないのではないかということで、合併はいたしませんでした。そういうコミュニティが盛んな地域でした。

（菅野資料5）私どもの地域では農に感謝をするということで、小さな赤ん坊から老人までが一緒になって、農業祭りというものをやってきました。事故の前まで24回開催されまして、遠くは東京の築地の近辺、銀座近辺の方々が事故の半年前には大型バスで来られて、ここには一昔前の生きる上での大事な生活文化があるということで、交流も盛んにしてきたところであります。そういう中で、今回の事故にあってしまいました。

（菅野資料6）私どもは、原発の事故というのは安全なものだと思っていました。それはどういうことかというと、飯舘は原発を立地した町村ではないのです。ですから今回、地震が起きたときには、津波はどうなったのだろうか、すさまじい姿だけが脳裏にいっぱいあって、それで精一杯でした。徐々にライフライン、電気、電話も回復してきたら、今度、原発事故の不安な話、恐怖心と混乱は想像を超えるものでした20キロ圏内の人たちが飯舘に1,500人の方々が避難をしまして、公共施設は満杯になりまして、我が家でも、1家族でもいいから受け入れようかという話をしていたぐらいの状況でありました。

14日、15日とこのようなことが続きまして、飯舘村民は、17日から20日前後にかけて、自主避難されました。行政は、避難をさせることはないという表現でずっといいましたが、住民はそうではないのです。見えないものへの恐怖で、パニックになりました。ですから、6,200人の中で、3,700人が自主避難したのです。

22日、23日に、生活もあるということで、次から次へと帰ってきたわけでありますけれども、行政サイドからは、直ちに影響はないとかそういうことでした。健康リスクアドバイザーのお話もあったりして、毎日、テレビを見ても何を見てもすがる思いで見えています。それはどういうことかというと、やはり参考にしたいのです。テレビではかたや安全だと言う人と、かたや危ないと言う人がいて、そういう議論をさせても、被災者のためには何もならないということで、混乱は進んでいったということがあります。

4月22日にやっとのことで、飯舘村を計画的避難区域に指定するということで、年間20ミリシーベルトを超えるおそれがあるから避難しなさいということで、第一陣の離村が始まったのは、5月15日からということであります。私も牛がおりましたので、私が完全に避難を始めたのは、6月の

末でありました。私は一時避難をし、牛に餌を食べさせるため通いながら完全避難はしてませんでした。

6月6日に、ここに書いてありますように、田尾陽一氏のグループが我が家に来ました。右の写真が18人のメンバーでありますけれども、ほとんどがリタイアした人たちであります、様々な分野の第一人者であります。その人たちが東京にいて、事故が起きたことを知って、かたや生活を奪われて大変な状況であるのに、東京でのほほんとしていいのか、現地に行ったら、何かしらできることがあるのではないかとということで、私のところを訪ねてきたわけであります。

私も1年以上前から、築地の本願寺のところで安穩朝市に食材を届けていました。今でも月に一遍、開いておりますけれども、私の家で生産されたもの、又は地域で生産されたものを食材として届けていたのです。そういう兼ね合いもありまして、私のところを訪ねてこられまして、田尾さんたちは知識があるので、何とかこの地で実証してみたいということなのです。それは大事なものです。そこから始まったわけです。

「宗夫さんも避難をしなければだめなのだろうから、どこか別なところを紹介してくれないか」ということであつたのですが、そうではない、私のところで、是非ともお願いしたいということで、そのときから、毎週土日の活動が始まったのです。毎週土曜日ですが、我が家へ来ます。7年過ぎた今でもそれは続いています。

毎週木曜日に会議を開いて、今週の予定等を話して、また明日の土曜日に来ます。これはずっと続いています。土曜日に私のところに集まって、弁当を食べて、基本的にはそこでどのような活動をするということで打ち合わせをして、そして、村内各地に散らばって、あるいは村外にも散らばって、いろいろな活動をしています。そういうことをやっております。現地で、現地の人と協働して継続的にやっている。信頼できるデータを積み重ねていくということで、今でも続けております。

（菅野資料7・8）飯舘は、被災地としてどちらかというと、暗い、汚された、そんな生活の部分というか、そういう目で世界的にも知れ渡ってしまいました。そういうことを払拭するために、信頼できるデータを世界に発信していく、明るいメッセージを発信する、そういうことが大事だということを基本にしながら、活動しています。

何から始まったかといいますと、その頃はモニタリングについても、あるいは健康についてもそうなのですが、直ちに影響が出ないとか、住民からすると、不信感でいっぱいなのです。何についても安全だと言われる。

私が一番最初にお話をし、お願いしたのは、正確に得られる機器で、しかも、村民が測れる、素人でも測れる機材を開発しないかということ、それが始まりです。これについては、国の研究機関、筑波の高エネルギー加速器研究機構の方々、その他の専門的な大学の協力、ベンチャー企業も含め協力を得まして、このようなGPSガイガーの開発をいたしまして、村民が自分の生活圏で、規則に則ったやり方でやれば、データがグーグルマップ上に全部出てくるのです。そうすると、どこが高いどこが低いということが、しかも与えられたデータではなくて、自分で得ることができたデータ

です。そういうことで、どんどんと地元を正しく知って、対応していくことができた一番最初なのです。

村民は感情的に走っていったり、メディアにも振り回されて、大変な状況が1年間続いたわけですが、1年以後、データが欲しいという冷静な人も多くなり、科学的な正しいデータを基にしながら測定しております。これは村民が測定したデータでありますけれども、このような測定機器を環境省が目付けて、村民主体で測っていいということで、当初、月に2回、村民40人が代わって測定をし、継続的にやっけていまして、これは平成24年から現在も続けております。現在は2カ月に一遍に変わりましたが、村民にパンフレットが常時配布されています。それから、ホームページ上にも、あるいは、ふくしま再生の会のホームページでも、誰でも見られるような状況になっています。

（菅野資料9）さきほどの話は空間線量ですが、今度は汚染されてしまった土壌の測定です。これについても、私どもの再生の会が村から委託をされて、村内の100カ所、除染をした後に行っております。

中央部はグラフなのですが、6センチのところまでは0です。その下が5,000ベクレルから7,000ベクレルまでということで、汚れていますけれども、これを除染して取り切れなかった部分が、その下にある土の部分です。こういうものは、かきまぜられるので、ほとんど影響がない状況になっておりますけれども、相当なばらつきがあるということを、村民も知りながら、その対応策をしているということです。

（菅野資料10）主なもののもう一つは、健康ケアです。私どもは様々なことをやっておりますけれども、一番大事なのは、人間が心身ともに健全で生きられるというか、人生を過ごすということです。

私どもの会は「モニタリング」「再生への試み」「情報の発信」「心のケア」「視察を含めた体験者の引き受け」など、5つの視点でやっているのですが、その中で、特に心身ともに「心のケア」が大切であります。飯舘村内にある伊達東仮設、福島市内の松川第一仮設を中心に、私どもの会で、基本的には今でも自主的な活動です。当初はどこからも助成金はお出せませんでした。このように、内科医、精神科医、看護師、臨床心理士、社会福祉士、介護福祉士、栄養士、全てのスタッフの方々、どちらかというと、キャリアを積まれている方々であります。仮設住宅で大変な暮らしている、触れ合いも余りない中で生活している人たちに継続的にやっけていまして、伊達東では40回です。松川第一でも37回です。大体1カ月に一回ずつ、避難解除になる前から、ずっとやっけてきておりました。

肌が触れ合う、あるいは同じ気持ちで対応してくれる。どちらかというと、社協の皆さんは、若い人たちが多いです。そういう中で、一生懸命やってもらってますが、社協ではできない部分は、年老いたリタイアした人たちが対応することで、年齢的親近感からやはり心を開いてくれる部分は多いと感じております。ですから、継続的に今まで続いてきたと思っております。

（菅野資料１１）昨年の３月に避難指示が解除されました。村内でもできるだけ活動していきたいという思いもありまして、老人クラブと共催で、このような健康ケアを昨年からスタートさせたわけです。当然昨年、仮設でもやっています。それにプラスして、佐須地区での心のケアも始まったということで、ボランティアの人たちにとっては大変なのですが、ボランティアとして参加して、支援するという気持ちが強いのではないかと思います。このような場所に来て、自分のためにもなるという気持ちで、みんな参加していただいています。ですから、本当にありがたいです。

（菅野資料１２）私どもの佐須地区でやっておるのですが、できれば飯舘村全体でできるような、そういうことを考える時期ではないかという声もでまして、次のステップに入ったわけでありまして。それが「健康いちばん！の集い」です。

（菅野資料１３）先週６月２５日に開かれた、新しい集いを紹介したいと思います。ここに至るまでの間には、避難所での心のケアをやっていたときからもそうなのですが、社協の方々、あるいは民生委員の方々も気になって顔を出されていました。大事なものがあるということで、何とかしてもらえないか、住民を常に思っている社協の方々から話が出されたわけです。社協の総会の際に、私どもの再生の会から説明をしてほしいということで、お話をし、結果的に民生委員も一緒にやるようになったのです。老人クラブの連合会も積極的に協力しての集いになりました。

村に戻っていない人たちも参加したいという人もおりまして、そのところをどうするかということで、動きまわったようですが、社協が村にかけ合って、避難先からバスを出していただいたようです。バスが来ないところは、民生委員が連れ添って送迎したということです。

これからの継続に当たり、大事な部分がいっぱいありますが、やればやっただけ意味はありますし、課題も多くありますけれども、その課題というのは、前向きな課題です。みんな素直に生きていきたい、生きがいを感じたいのです。

このような会を開きまして、内容についてはここに出ています。４２名の村民の方々が参加されました。輪投げとか、いろいろなことをやっておりましたが、まず村民の方々は、久しぶりに会ったという言葉から、今はここが痛くてとか、よもやま話も尽きないぐらい、そういう和やかな雰囲気次から次へと出てくるのです。こういう人もいる、この後の集いに、みんなを集めてこようなどのお話もあったりします。

それから、医療行為はしないのですが、精神科医あるいは内科医の先生に、健康についての講話をいただいております。大事な支えになります。飯舘には、村から委託されたクリニックはあるのですが、今は火曜日と金曜日だけ開いておりますが、不安な面もいっぱいある中で、何とかその不安を解消しながら、飯舘で生きがいを感じながら、残された人生を過ごすことができるように対応していくことの大事と感じております。

（菅野資料１４）これから全てそうなのですが、１つの組織とか、行政だけでは、再生というものではできません。全ての分野が協働することが大事だと思って、個人的にもあるいは再生の会としても取り組んでいます。

一番上に「村民」を出させていただいておりますが、村民も思いはばらばらです。放射能に対しての不安、あるいは7年が経ってしまったということで、そのばらばらの気持ちが変わってきています。避難先での生活環境も含めて、地域を思う気持ち、これからのことを思う気持ちについて、共有することがいっぱい出てきました。以前は、戻る戻らないで、住民同士が反発し合っていたことが物すごく多かったです。現在はそうではなくて、お互いがお互いの気持ちを尊重しながら、語り合って対応している、そういうものが出てきております。

先日、よりどころの公民館と神社の草刈りをしたのですが、参加者が相当減るのではないかと感じていました。昨年も開いたのですが、昨年よりも今年は多かったということで、地域を思う気持ちというのは、皆さん強く感じております。ですから、協働する気持ち、お互いにお互いを認め合う気持ちというのが一番大事だと認識してきてます。そこがあれば、全てがうまくいくと思っています。

それから「行政」ですが、国、県、村、大ざっぱにそのような形でありますけれども、末端の行政が一番大変です。かわいそうなぐらい大変です。村役場は、村民と同じような形だと思っています。縦割りの行政、横割りを克服した形での連携といいますか、そういう形がないと、行政の力も発揮できないと思っています。

「メディア」も正確なデータを発信する。今、情報化時代でありますので、現地にいると、正確な情報が伝わっていないのではないかと、そんなところも一緒になって考える必要があります。

それから産業界、「企業」です。技術の部分から販売の部分まで、あるいはハイテクの分野が関わっている部分を含めてですが、協働することが大事です。

「大学を含めた研究機関」の部分も、大事な部分です。

トータル的に結束して対応する。この大きな5つが、協働することが大事だということを基本に重んじながら、常に活動しています。

ちょうど時間となりましたので、以上で、私の主な活動の報告とさせていただきます。まことにありがとうございました。（拍手）

○司会：菅野様、ありがとうございました。

続きまして、宮城県の東松島市からお越しいただきました、東松島市あおい地区会会長の小野竹一様、東松島市総務部市民協働課協働推進班、班長の難波和幸様、御登壇をお願いいたします。

○難波氏：東松島市からまいりました、東松島市の総務部市民協働課の難波と申します。よろしくお願いいたします。もう一人、あおい地区会の小野会長です。

○小野氏：東松島に新しくできた集団移転地、あおい地区の連合会の役員、あおい地区会の会長をしております、小野でございます。よろしくお願いいたします。

○難波氏：（難波資料1）始めに、私から東松島市の復興の現状について、お話をさせていただいて、その後、小野会長から、あおい地区の取組をお話いただきまして、最後にそれを行政でどうサポートしているのか、どういう形で話し合いをしながらまちづくりをしているのか、お話をさせていただ

きたいと思います。

（難波資料２）東松島は、ちょうど宮城県の中央部に位置し、松島町の東側にあるので、東松島市ということで、素晴らしい景観とおいしいものがたくさんあるまちということで、今は、ウニ、アワビがおいしい季節になっております。

（難波資料３）震災の状況につきましては、資料にあるとおりの状況になっておりまして、浸水区域は市街地、住宅が立ち並んでいるところの65%、被災市町村の中では、最大の面積という形になっております。

（難波資料４）災害危険区域の設定ですが、東松島市では「津波防災区域」という名前で設定をしまして、集団移転という形を進めました。いろいろな形で、第３種ぐらいになるとかさ上げをすれば、新しい家を建ててそこに住むことができるということにもなっております。

（難波資料５）移転を促進する区域、先ほどの津波防災区域とかぶるのですけれども、そちらから、個別移転、集団移転を待ち切れない方とか、集団移転地の面積では足りないという方々もおりまして、個別に内陸部に移転した人もいます。

集団移転、高台と内陸部への移転ということで、市内で７団地を設定しております。その中で、今日お話するところは、大曲浜というところから多くの方が移転した、あおい地区について、この後、小野会長からさせていただきます。

集団移転の特徴としては、移転先についても、住民の代表の方と話し合いをしながら決めていったということです。だから当初、この位置ではない箇所が、行政側で提示したところだったのですけれども、もう少し高台にシフトさせてくれという要望もありまして、変わったところもあります。

もう一つの特徴ですが、移転のための宅地は、52年間の定期借地契約、全て借地契約ということにしております。分譲にはしませんでした。その内30年間については、賃借料は減免、実質無償でお貸しすることを打ち出して、とにかく東松島市に留まってくれという施策を打っております。これは他の市町村ではないことだと思います。

（難波資料６）災害公営住宅も、17の地域で1,101戸建てるということで、赤字で示されているのは、集団移転地の中にある災害公営住宅になります。

ここで、小野会長にバトンタッチいたします。

○小野氏：（小野資料１）それでは私から、座ったままで、お話をさせていただきます。

あおい地区でございますが、今、難波から説明がありましたように、市内７カ所の防災集団移転団地の中で、最大の580世帯が入る集団移転地でございます。

（小野資料２）私が住んでいました大曲浜を含めて、東松島では1,110人が亡くなって、その他に、まだ24人が行方不明でございます。

慰霊碑を建てまして、大曲浜の方の名前が刻んであるのですが、観音様の頭のとっぺんは、津波の高さを忘れないようにということで、6メートルの高さにしてございます。

（小野資料３）大きい写真の船の後ろにある家が、実は私の家でした。海から10メートルぐらい

しか離れていないところに、私の家がありました。

（小野資料４）これは、津波で、おじいちゃん、おばあちゃん、お母さん、３人兄弟の一番末っ子の弟を亡くした家族の方、当時高校２年生だったお兄ちゃんが、全国の方に呼びかけて、毎年５月５日に、青いこいのぼりをたくさん揚げているというイベントをしている模様でございます。

（小野資料５）その後、避難所、仮設住宅に入っていたわけですが、仮設住宅に入りまして、私、仮設住宅の自治会の会長を仰せつかりました。いずれ仮設住宅から出なければいけないけれども、生活している間は、自治会として、住民の方と一緒にいい生活をしたいという思いから、自治会活動の目標を５つ掲げました。

役員の方、住民の方と共有して、生活をしていきますということで、目標を立てました。１つ目は、住民に笑顔と元気を取り戻す活動。２つ目は、一人暮らしや高齢者の方の見守り活動。３つ目は、イベントを行い、参加意識を持たせる活動。ひきこもり、閉じこもりをなくしましょう。４つ目は、団体生活での秩序やルールを守る活動。５つ目は、将来に向けて、自立のための活動。この５つの目標を掲げて、住民の方々と一緒にいろんなイベントを行ったり、ごみ当番のルールだったり、夜間パトロールの強化だったり、そういったことを行って、生活をしてまいりました。

（小野資料６）これはあおい地区全体の敷地に対する図面になりますけれども、道路から上の方、黄色い部分が災害公営住宅です。これが307世帯です。下の白い部分、何丁目ということで、隠れて見えない部分がありますけれども、こちらが273区画です。これは自力再建で、自分で家を建てる方の区画でございます。合わせて580世帯になります。

一番下に数字が書いてあります。これは市民センター単位で、この地域から何世帯行きますという数字が書いてあります。私が住んでいた大曲浜地域は56.3%ということですので、５割ちょっとの人が私と同じ地域の方です。４割強の方は、私と全く関係ない様々な地域から入ってまいります。一番左側が一番わかりやすいと思いますが、宮戸地域0.8%と書いてあります。580世帯の中の４世帯です。これは、この後お話をいたしますので、数字として、覚えていただければと思います。

（小野資料７）私が住んでいたのが、一番上の赤い線で囲んである「大曲浜地区」というところ です。その後、私は黄色い線の「矢本運動公園仮設住宅」に移ってきまして、今、一番下の青い線で囲ってある「あおい地区」の新しい集団移転地に移ってきたということです。

（小野資料８）仮設住宅に入りながら、2012年11月に、集団移転に向けてどんなことをやりながら住宅をつくっていくかということで、まちづくり整備協議会を立ち上げました。このときの名称は「東矢本駅北地区まちづくり整備協議会」という名称でした。団地の名前を決めたら、その団地の名前に変えますということで、実際2014年に団地の名前を決めて「あおい地区まちづくり整備協議会」に変わりました。そして、2016年10月に解散をしております。

（小野資料９）こちらは、協議会の組織体制になっていますけれども、役員さんは38名になっていただきました。これは先ほどの各地区、市民センター単位のところに出ていましたが、旧行政区からこちらへ移ってくる方については、旧行政区から最低１名ずつは役員さんを出してくださいと

いうことでしたので、38名になりました。私と同じ大曲浜地区は7つの行政区がありましたので、38名のうち約10名が私と同じ地区から役員に選ばれております。

全員で同じことを検討するわけではなくて、5～6人ぐらいの少人数のグループに分かれて、専門分野として検討してまいりましょうということで、8つの部会をつくりました。これを全部御説明すると、物すごく時間がかかりますので、この中で、重要な部分だけをお話させていただきたいと思います。

（小野資料10）いろんな話合いをする中で、住民の意見を取り入れようということで、これを最重要課題として、ワークショップを行っております。テーマを決めて、1回から3回まで、こんなテーマで皆さん語り合ってくださいということでやっていたけれども、ワークショップという名前が、若い人しか参加できないのかということで、高齢者には不評だったのです。

（小野資料11）その後、井戸端会議という名前に変えました。このことによって、高齢者の方にたくさん参加をしていただいて、いろんな意見を出していただいたということです。

（小野資料12～14）こちらは、ワークショップ、井戸端会議をやっている模様になります。公共施設設計検討部会の中で検討され、皆さんの意見を取り入れて、最後にでき上がったものとして、これが一番わかりやすいのでこれをお話したいと思います。

（小野資料15）あおい地区の中には、公園が4カ所あります。行政は、私たちが要望しないと、4ヶ所同じ規模のものをつくります。公平性を保つというのが、行政の役割なのです。これは仕方がないと思うのですが、使う私たちにとっては、同じ機能のものが4ヶ所あっても仕方がないということで、住民の方々にいろんな意見を出していただいて、4ヶ所あるのだったら、四季があふれる個性的な感じ、それぞれ使い道の違う公園をつくりましょうということになりました。

「春の公園」は、全く遊具がありません。桜の木を植えただけで、お祭り、イベントをやるための公園ということで、広い広場の公園にさせていただきました。

「秋の公園」は、もみじを植えました。初め、住民の方に部会から提案したのは、秋に紅葉の下でバーベキューができたらいいという話をしたのですが、住民の方からは、そんなものではなくて、秋はスポーツの秋とも言うのだから、健康づくりのための公園にしようという意見が出ました。今、健康遊具が20種類あって、日本一の公園ができました。

「夏の公園」として、一番小さい公園なのですが、ナツツバキを植えて、小さい子どもたちのための公園にしました。複合遊具を取り付けて、子どもたちが、安心して朝から晩まで遊べるような公園の開発をしてまいりました。

最後、「冬の公園」として、仙石線、東矢本駅の北側にある公園ですので、ここはケヤキの木を入れて、冬になったらイルミネーションを取り付けて、このまちの明るさ、楽しさを表すための公園、そんな意見が取りまとめられまして、行政と一緒にこんな公園ができました。

（小野資料16）その他に、これは家を建てるための区画決めなのですが、私たちは抽選をやりませんでした。やり方については、そちらに書いてあります。これも説明すると長くなりますので、

飛ばします。

（小野資料 17・18）今度は、まち並みルールを作成です。家を建てるときに、自分の好き勝手に建ててはだめです、景観を保つのは物すごく重要ですよということで、街並み検討部会の中で、こんな決め事を決めさせていただきました。これも住民の方々の意見を取り入れながら、つくっていきました。隣との境界線からは、1.5メートル離しましょう、道路からは1メートルは建物を建てないで、緑地帯のような形にして使いましょう、ブロック塀はやめましょう、そのことによって、子どもたちの交通事故をなくすまちにしましょうということで、この部会の部会長さんになってくれた方は、まだ30代の方です。30代の方々が考えてくれたルールがこのルールで、これは地区計画だけではなくて、地区条例にまでさせていただきましたので、これから30年後、50年後に、新しく家を建て替えますというときにも、この条例が生きていますので、あおい地区のまち並みは、全く変わらない、そのままの状態は何十年も続きます。

（小野資料 19）これは、あおい地区に住む人たちのために、今、どんなことをやっているのかということについて「まちづくり通信」を発行しまして、情報共有をしてきました。今、まちづくり整備協議会では、どんなことを考えて、どんなことを検討しているのか、そして、皆さんにどんな意見を聞きたいのか、それをまとめて、いつ総会をやって、それを決めるのかということを通して発行しております。3年半の間に、全部で31回出しておりますので、1カ月に1回の割合で、郵送で送りつけて、情報共有をしていたということです。

（小野資料 20）新しいまちの名称を決めたわけなのですけれども、田んぼを埋め立てて、新しい団地ができました。田んぼでも住所があったわけです。でも、そこには今まで人が住んでいなかったのです。カエルと同じ住所に暮らしたくないということで、全国の方に応募していただいて、それを名称選考委員会の中で検討して、10点を選んだのです。全住民の方580世帯、1,800名に投票していただいて「あおい」という名前になりました。

（小野資料 21～25）こちらは、経過の中で、いろんな勉強会、相談会、研修会をやっております。

（小野資料 26）コミュニティ形成促進への取組ということで、今日のテーマになると思いますけれども、私たちは、まちづくり整備協議会をつくって、6カ月後には、交流会をしているのです。まだ誰も住んでいないけれども、ここに住むことを決めた方は集まってくださいということで、顔の見える関係を随分前からつくっていきましょうということです。何回も交流会をやることによって、井戸端会議、ワークショップなどにも参加をしていただいたということです。

（小野資料 27・28）災害公営住宅については、行政でつくって貸すわけですから、借りる方は、黙って文句を言わないで入ってくださいということになるのですが、部会の中で検討させていただいて、いろんな意見を取り入れていただいて、将来払い下げをする、自分の家とするための住み方、こんな家をつくってほしいという要望もどんどん出させていただきました。

（小野資料 29）あおいペットクラブをつくりました。これは津波で助かったペットを、災害公

営住宅で住む人が飼っていいですというルールを私たちがつくりますから、許可してくださいということで、出来上がっております。

（小野資料 30～33）その後、各自治会ができてくるわけですがけれども、住んでから自治会をつくるのではなくて、コミュニティ推進部会という部会の中で、こんな住み方をしましょう、自治会は3つつくります、自治会の規約はこんな規約にします、当番はこんな当番が回ってきます、ごみ当番もこんな形でやりますというように、いろんな取り決めを、住む前から住民の皆さんと一緒にやってつくってまいりました。住んでからつくるのではなくて、住む前からつくることによって、安心して待つことができるということでやってまいりました。

あおい地区会というのは、3つの自治会の自治会連合会に当たるものとして、1つの自治会では解決できないことを連合会の形でやりましょうということで、地区会をつくってまいりました。

（小野資料 34・35）あおい地区会の本当の目的は、こちらの体制図の一番下に4つ書いてあります。「高齢者等見守り部会」「公共施設管理部会」「研修イベント部会」「あおいペットクラブ」です。 最重要なのは「高齢者等見守り部会」です。集団移転で入ってくる方、ここにいた方は、高齢化率が物すごく高いです。それから、独居率も高いです。

（小野資料 36・37）特化してお話をしますと、5階建ての集合住宅が2棟あります。77世帯の方が住んでおります。その一人暮らしの方、独居率は71%です。10世帯中7世帯が一人暮らしをしているわけです。高齢化率でいくと49%です。半数の方が高齢者なのです。そんな方々を、今、社協さんでやっていただいている、見守り訪問活動だけで守れるのですか、その方々は夜はいません、土曜日日曜日は来ません、連絡がつきません。やはりそこに住んでいる住民の方々が見守り活動をして、いつでも連絡がとれる、いつでも手を差し伸べることができる環境をつくっていきましょうということで、今、見守り活動をやっております。

それから、高齢者の方でも元気な高齢者がたくさんおりますので、介護予防のためのあおい農園をつくりますということで、これはコミュニティ農園として、今、活動をしております。サツマイモを1,800本植えまして、今年の秋には、2トンぐらいとれるという活動をやっております。

（小野資料 38）こちらに10点あるのですが、これができたとき、あおい地区は日本一のまちになりますということです。まちづくり整備協議会ができたときに、このまちを日本一のまちにしたいという思いで、まちづくりを行いましたけれども、現在も日本一のまちづくりに向かって進んでおります。

（小野資料 39）昨年6月に、快適度日本一というまちに認定をされまして、今年の6月には、全国でも29市町村、県内としては唯一、SDGs未来都市の指定も東松島が受けることになりました。そんなまちが東松島では出来上がっております。

私からは、以上です。それでは、難波に移ります。

○難波氏：（難波資料 7）私の資料の7というところから、スタートいたします。

先ほどのあおい地区を始めとして、集団移転地のまちづくりを支える体制は、どういう形で行わ

れていたのか。資料にあるとおり、移転支援班を生活再建支援班の中に新たに位置付けまして、そこが中心となって、話をしていくという形になりました。

（難波資料 8）ここが中心となるわけですがけれども、5人の職員だけではどうにもならないということもありまして、いろんな機関に協力・連携をいただいて、つくっていきました。「復興応援隊」という県事業の組織であったり、「地域復興推進員」という形、これはJICAから派遣していただきました。「復興まちづくり推進員」というNPO等の中間支援組織が受託し復興まちづくりを支援する組織とも連携しました。コンサルタントやNPO法人に協議会運営支援等もしていただきながら、新しいまちづくりを進めていきました。

（難波資料 9・10）市役所、庁舎内に横串を刺しまして、多くの職員にかかわっていただくような形になりました。将来的には、集団移転地も1つの市内のまちになるということになりますので、初めからまちをつくるに当たっても、将来、担当となる部署に主体性を持ってもらうという部分で、これを進めていきました。

（難波資料 11）情報共有もきちんとイントロの部分でやりました。今、集団移転の団地で、何が話合われているのかという部分について、しっかりと共有を図りました。

（難波資料 12）先ほどもありました、いろんな意見が通ったまちづくりについて、初めから対話できていたかということ、実はできていませんでした。

（難波資料 13）最初は全くできなくて、どういう状況だったかということ、住民VS行政という形の中で、住民の方はふるさとを失った喪失の中から、新しいまちには強い希望・期待を抱いておりましたけれども、行政側は、予算・法律・時間などの制約があって、上手く寄り添えない、なかなか進まない合意形成という状況になりました。

（難波資料 14）このままでは一步も進めないというところまで、どん底まで落ちまして、どうしたらいいのだろうかという形になったときに、目指しているところは同じではないかということに気がきました。お互い疲れ果てて気付いたということで、目指しているところは、暮らしの復興、ふるさとの復興という形になりました。

（難波資料 15）そこから、本音での話し合いが始まりました。市、行政では、素案を早目に提示して、修正可能時期も提示して、できること、できないことを明示し、できない理由の丁寧な説明をするようにしました。対住民につきましては、本当に必要なものは何なのかという部分を取捨選択していただきましたし、優先順位、どうしても叶えてもらいたいところを示してもらう、代替案も検討してもらいましたし、住民同士の総意を図っていただくことになりました。そのことによって、先ほど事例紹介したようなまちができた。やはり自分たちの意見が反映されたまちは、愛着の持てるまちになるというところが、良かったところだと思います。

（難波資料 16）東松島市の事例が、少しでもお役に立てたらと思います。ありがとうございました。（拍手）

○司会：小野様、難波様、どうもありがとうございました。

続きまして、岩手県の釜石市からお越しいただきました、NP0法人アットマークリアスNP0サポートセンター、代表理事の鹿野順一様、釜石市復興推進本部生活支援室、室長の山崎教史様、御登壇をお願いいたします。

○鹿野氏：おはようございます。岩手県の釜石市から参りました、アットマークリアスNP0サポートセンターで代表をしております、鹿野です。よろしくお願いします。

○山崎氏：釜石市役所生活支援室の山崎と申します。よろしくお願いします。

○鹿野氏：（鹿野資料1）それでは、始めさせていただきたいと思います。

ここには、災害復興、防災、民間支援みたいなことを書いてありますけれども、今日参加なさっている方々の名簿を見て、被災者さんに直接関わる方面の活動をしている方が多いと思ったので、ここを話したいというところだけ話そうと思うので、資料は飛ばしていくところもありますので、前の方を見ていただけるといいと思っています。

（鹿野資料2）自己紹介です。今こうやって、NP0活動で被災地で支援していますみたいな感じの言われ方が多いのですが、元々釜石というまちのお菓子屋さんなのです。なので、今でもかたくなに、本業は菓子屋ですと言い続けているのですが、震災どうこうという以前に、この辺もそうなのかなと思うのですが、地方都市の衰退ということがあると思います。釜石などは、特にそうなのですが、人がだんだん少なくなって行って、少子高齢化が進み高齢化率が40%、過疎認定をいただきましょう、いただいてしまったほうが、いろんなことができますみたいなところまで、震災前はっていました。その中で、まちづくりをやらないと、お店を開けて、さあおいでと言っても、まちを歩く人が少ないので、まちの中を歩く人を増やしていこうという活動をするために、2004年にまちづくりのNP0法人をつくって、活動を開始しました。

（鹿野資料3）そして、時間がずっと流れていく中で、3月11日に地震・津波が起きました。このときから、好む、好まざるに関わらず、私は被災者と呼ばれ始めます。

（鹿野資料4・5）そして、うちのNP0は、被災地のNP0という言われ方をします。もちろん被災もしましたし、かたくなに言い続けているお菓子屋さんのありし日の姿、右側は地域で活動するためのNP0の拠点、津波で建物がなくなったりしました。これは地震倒壊ではないのです。

地震のすぐ後に、どうしても行かなければいけないことがあって、私は釜石から日立まで車で行くのに常磐道を通ったときに、屋根が崩れている、地震でがたがたとなって、いわきとか、あちらに行くときに初めて見て、福島は地震で建物が壊れていたと初めて知りました。これは建物の横が駐車場で、海からの津波がそういうところをめぐってくるのです。それで、津波で壁が持っていかれて、倒れたという状況で、こんな感じのまちの中にありました。

家族は半分になってしまいましたけれども、自分の命は助かりました。うちのスタッフも命に別状はなかったという中で、当初、近くの病院でボランティアをやっていたのです。患者さんのケアもそうですし、避難所ではなかったのですが、避難してくる方がいて、対応をということで、お手伝いをしていました。

2日目、3日目、まちの中に電気がない状況の中で、夜明け前に、遠くのほうに紫色とか黄色とか、パトライトがいっぱい見えて、これは何だったのだろうかと思ったら、自衛隊とか、釜石市は静岡の消防が早かったのですが、いろいろなところからの応援の方々、道路を開く、建物をよける重機のパトライトがずっと夜明けを待っているのを見て、そうか、これだけいろんな人たちが支援をしに来てくれると思いました。

俺らは、もともとまちづくりをやろうと言っていた。もっと言うと、昔、北朝鮮のミサイルが太平洋に落ちたとき、冗談で言っていたのです。誰も死ななくていいのだったら、ここに落ちてくれないか、その方がまちはつくりやすいみたいな、馬鹿な話をしていました。今回は、残念ながら釜石だけで1,000人を超える死者が出てしまいましたけれども、だからこそ、なおさら、自分たちのまちなのだから、もう一回自分たちでつくり直そうということで、活動を再開させたのが3月の末です。

（鹿野資料6・7）ここからが本題に入っていくのですが、自分たちにできることをということで、緊急支援物資の搬送、メディアの情報というのは、本当のものもあれば、嘘のものもある。様々だけれども、文句を言うだけでは仕方がないので、自分たちで情報発信をやり始めました。

仮設住宅が釜石市で出来上がったのは、2011年8月です。避難所が閉鎖されて以降は、仮設でのイベントをしました。

注目していただきたいのは、左の一番上の写真です。仮設で場所を何とか確保して、事務所として活動を再開しました。通信も途絶えがちな場所で、コマーシャルも出していないのですが、私らのところに、毎日20人、30人、40人の人たちが、話を聞かせてくれと来るのです。何で来るのかわからないわけです。同じような思いをされた方は多分いると思うのですけれども、私らは探される存在になっていたということを後で知ります。

支援者の方々は、東北で、福島はとてもではないけれども入れる状況でなかったことは知っています。岩手、宮城で、どこに行けば誰がいるのかということで、最初は自治体でした。自治体は被災しているので、外部とのコンタクトがとれない。

次は、過去の大災害に倣っていくと大学です。岩手県沿岸に大学はあるのですけれども、看護系の短大があるだけです。宮城は石巻専修大学がありましたので、石巻専修大学には殺到しました。だけれども、岩手にはなかった。

次は、何かというと、現地のNPOはどうなっているのかというのが、次に来たらしいのです。私らはローカルなNPOなので全く知りませんでしたけれども、この日以来、私らの知らないところで、どうやら岩手では、元々そこで活動していたNPOが、活動を再開したらしい、鹿野という奴がいるらしい、そこに行けと、目がけて来るようになったのです。企業、NPO、NGO、各省庁を含め、毎日その対応をして、1カ月で1,000枚以上の名刺が集まるというのは、被災地あるあるです。

そのときに思いました。阪神・淡路大震災、中越、もっと言うと、奥尻、私も1週間、2週間経つてくると、もうわかった、いい、見ると悲しくなる、かわいそうだと思ってしまうからというこ

とで、それ以降見なかったのです。同じことが起きるだろうと、自分の身に降りかかったときに思いました。そして「見てくれ」「忘れるな」というのは、そのときから言わなくなりました。見なくなる、忘れる、こちらから思い出させてやればいいと思ったのが1つです。

もう一つは、バブルの波が来る、震災バブルです。これも過去の災害のことを考えると、長くて3年ぐらいで外からの支援はなくなる、過去もそうだった。だったら、意識してその波に乗ってやろうと、うちの理事と相談をしました。どうせなくなるのだったら来るもの拒まず、10回でも、20回でも同じ話をして、この人たちとのコネクションをつくろうと思いました。もしかすると、ここが7年間の私の活動の全てと言っていいほどのキーポイントだったと思います。これが伝えたいことの最初です。

（鹿野資料8）この辺は、何もなくなったところに、明かりを灯したということです。昨日の夜、飯館から原ノ町、6号線をずっと下ってきました。先ほどもちよっと言っていたのですが、ここからが帰還困難区域ですと言った時点で、7年前のあのときの空気、匂いが鼻をつくというか、生活感のない暗がりの中で、横道は全部ゲートで閉じられていて、信号は赤にならないです。黄色の点滅から青のままで、ずっと走ってきて、道路の補修もなっていないのでしょう、車が来るたびに、わだちはすごい水しぶきです。その空間がこれだけの広さに広がっているのだと思いました。

富岡に入った瞬間に突然、左側の喫茶店に明かりが見えるのです。そのとき、私はほっとするというか、がく然という思いが体を襲ったのです。何もなくなっているところに、人の気配があって、ぽつんと明かりがついていたら、蛍ではないけれども、そこには人が集まってきて、お話をし合う、コミュニケーションの中で人の気持ちが変わっていくという経験をしたので、場所の持つ力はすごいと思っていて、瓦れきの中でもいいから、明かりが灯る場所がほしいということをやったのです。

（鹿野資料9・10）この辺は飛ばしていきます。

（鹿野資料11・12）福島と状況が全く違うので、避難所での様々な支援とか、中での人間関係みたいなことが、混乱として多くあったという思いがあって、仮設住宅ではその混乱を持ち込みたくない、支援に入りやすいところにだけ入って、小規模な仮設とか行きづらいところには、支援の手も届かないみたいな不公平感をなくしたいということで、例えばイベントの受け付けとか、集会所の鍵の管理とか、生活環境の見回りとか、あと、言葉を選ばないで言うと、生存確認をしていました。独居高齢者も含めて、今日この人は生きているかどうかという確認をしていきたいということで、2011年9月時点で、釜石市役所さんにこういうことをやりたいと言って、事業提案をしています。

この3月まで、いわて連携復興センターというところの代表もやっていたして、そこでの様々な活動の中で、そちらの仲間が、釜石市だけではなくて、被災地における仮設住宅の見守り業務のプランを立てたのです。釜石市を挟む南北に、大槌町、大船渡市があるのですけれども、ここでも同様の事業を展開しています。だけれども、大槌町などは人材派遣会社との協働でやったのです。私

は、俺ら地元のNPOがいるのだから、よそからの人ではなくて、地元の間がやりたいということで、我々が主体となってやりますということで、釜石市に協働の提案をしました。その事業は、平成24年2月以降、今も継続して活動が続いています。

（鹿野資料13・14）釜石市だけで66団地あります。岩手沿岸の場合は、集落と集落を峠でつながっている形なので、どこの集落に行くにも、衛星型の都市みたいな感じです。ぐるっと巡回して、回ってくるみたいなことができないのです。行って戻って、行って戻ってということで、福島との規模の違い、距離感の違いはありますけれども、元々住んでいたところから、ばらばらに散らばっているということで言えば、同じような形だと思っています。

ここで私らは、責任を持ってということではなくて、相談対応もいたします。本部にコールセンターも設置しましたので、電話での相談もオーケーです。建物に何か不具合があったら連絡してくださいということもあります。この中でお伺いしたのは、自分たちが応えるのではなくて、市役所さんと一緒にやっている事業ですので、担当部署さんにつなぎます。必要があれば、社会福祉協議会にもつなぎますし、警察も消防も含めてです。自分たちはつなぎ役、サポート役なので、必要なところにつないで、それに必要な対応をいただいて、住民さんに戻すという役割を行っています。

（鹿野資料15）緊急雇用創出事業というのは、聞いたことがあると思いますが、被災地に行って、仕事を失った方のためにという財源を使って行っている事業なので、雇用をしている方は、ほぼ素人さんです。福祉とか保健などの専門家ではありません。これは人の命にかかわる話なので、突っ込んで、何かあったときにお前の責任だみたいなことになるような仕事のさせ方はしなかったもので、今言うように、専門で対応できるところにつないでいくということをやりました。

こういう形でやるのですが、左上の写真は黒いものがあります。ちょっと見えないかもしれませんが、SIMです。SIMというのは、わかりますか。携帯電話などに入っている、小さいものです。あれが入ったタブレットを持って、巡回をしています。なので、この場で安否確認も含めて、全部入力をしていきます。リアルタイムでという部分が、この後に出てくるのですが、企業で使っている顧客管理システムを仮設住宅の見守り用に改造というか、アジャストさせて使っているんで、入力した時点で、事業本部、市役所の担当、社会福祉協議会、各地域における生活応援センターのセンター長さんが、随時その情報を見ることができる状況で、この事業を行っています。

（鹿野資料15～22）同時に、被災地のNPOあるあるなのですけども、事業が増えてくると、拠点も増えていくということで、ばらばらの場所で業務を行っている。私などは、外に出ることも多いので、どこにいても、指示命令系統がきちんと通るようということで、もちろん人数が膨大に増えたところもあったのですけれども、うちのNPOでは、クラウドツールを活用することで、時間と場所に関わらず、きちんとした決裁であったり、指示命令が通るという仕組みを、日本マイクロソフトさんの御支援をいただいて、一緒に形にしてきました。ただ、それを使いたいからということではなくて、目的は、あくまでも被災された住民さんの生活の質の向上とまでは言わないけれども、過不足のない生活を送れる、そのためのサポートだということです。

連絡員さんは、うちのスタッフなのですけれども、多いときで90人正規雇用という形でスタートしました。高齢の方が多いです。タブレットといっても、なかなか難しいです。ここの研修と、個人情報の取扱いに伴うコンプライアンスの研修、ビジネスマナーを含めて、膨大な時間をかけてやっています。毎年、春先、4月5月には、全体研修と、企業さんにサポートをいただいて、ビジネスマナーも含めて人とお会いするときに、相手に嫌な思いをさせないというところから、家に帰ってもこの業務で知ったことは、家族にも話してはいけないみたいなことも、きちんと時間をかけて、研修をやらせていただいています。そういうことが書いてあります。あとは、読んでいただくと、知っているという話が多いです。

（鹿野資料23～33）これは津波被災の後ですけれども、被災地というのは、こんな状況に陥ります。電気、ガス、水道が使えなくなります。今は電気の復旧が早くて、オール電化のところは、ガスがとまっても大丈夫みたいな話もあるのですが、生活に必要なインフラが全て失われるという状況が来る。

行政さんなどは、特にそうなのですけれども、今から地震が来ますと言って来るわけではないので、その日、その時間、たまたま業務についていた場所で全員連絡が途絶え、初動の人員所在の確認がなかなか難しい。もっと言えば、行政施設の機能低下があります。福島のことと言えば、行政も全てがストップしたという状況でした。こういうことが起きます。私も思いつくままに書いてだけで、これだけ、行政さんがやらなければいけないことがあります。無理です。

防災のための取組といって、机上訓練をやっている。まだ大規模災害に見舞われていない行政さんは実体験がないので、どのぐらい何をやらなければいけないのかわからないです。だから、民間支援が必要だということをここには書いているのですけれども、この中で言いたいことは、外からの支援、受援力はすごく必要ですが、「最後は地元の人」という言葉が最近嫌いになってきていて、最後ではなくて、最初から地元の人に関わっていかないと、この地域の行政が機能低下するということは、地域がだめになっていくということなのです。自分たちのまちだという当事者意識を持った人だけでいいので、地域が一丸になるという、陳腐な言葉かもしれないけれども、このときこそみんなで一緒にやらないと明日が来ないという状況が起きてきますということを、今日は言いたいと思ったので、昨日と言っていることが全く違うのです。

日常の経験が、常日頃の備えがとよく言うのですけれども、防災というテーマでこれをやったら、3回目には人が来なくなります。やり尽くしてしまうから、わかったとなってしまいます。だから、子ども・子育てのことでいいです、高齢者のことでいいです、障害のことでいいです、何でもいいので、いろんなテーマで平場で、行政、民間、企業が話合える場所と機会をつくるのが、そのときに生きるみたいな話なのです。

現場でタブレットを使った連絡員事業が、どういう効果を発揮して、具体的にはどうなのかということは、今日お昼を食べたりする時間もあるみたいなので、詳しく聞きたいという方がおいでになりましたら、実物をお見せする形で御説明したいと思いますので、そのときはよろしくお願いし

ます。

大分時間を食ってしまいましたけれども、山崎さん、お願いします。

○山崎氏：（山崎資料１）私からは、鹿野さんのところと一緒に取り組んでいます、仮設住宅の運営について、中心にお話したいと思います。

（山崎資料２）仮設住宅は、当初、建設部の「都市計画課」が担当しましたがけれども、自分たちの業務の中で、こういった業務に対応できないということで、専門の部門「仮設住宅運営センター」が設置されました。平成26年４月から、「復興推進本部生活支援室」になりまして、現在、その流れで業務に取り組んでおります。現在は、仮設住宅の運営の他に、住宅再建の補助の関係の申請窓口とか、生活再建全般の相談窓口ということで、対応しております。

（山崎資料３）市内の仮設住宅の状況については、５月末で被災の入居世帯が578世帯になりまして、ピーク時は2,845世帯の方が入居しておりましたので、大分減ってきたことになります。仮設の自治会の設立は、当初ほとんどの仮設で自治会が設立されました。97%という設置率になっております。あと、プレハブ仮設の他に、みなし仮設もまだございまして、今このように残っている状況になっております。

（山崎資料４）仮設の入居当初の課題は、いろいろありましたけれども、ハードの住環境そのものの課題が多く、皆さんから苦情をいただきましたが、それについては、時間を追うごとに、随時対応していったということになります。

（山崎資料５）もう一つ大きな課題としては、仮設内の見守りとか、自治会支援が重要な課題となっていて、仮設入居に際しては、地域性が考慮されない形で、スピード重視ということで入居を進めてきた流れで、仮設団地ごとに被災地区がばらばらの方が一緒に生活することになりましたので、自治会の立ち上げがどうしても必要だということで、共通の認識としてありました。

見守りの活動ですけれども、まず行政としては、釜石市内の８地区に生活応援センターが元々ありまして、出張所の機能と、プラス保健師がそれぞれ常駐してありまして、健康相談とか、そういったものの取組です。あと、公民館活動も実施してありまして、要は地域ごとに、それぞれの地域づくりをしていこうという流れでやっておりました。

震災後は、ここが地区の被災者支援を一手に始めましたけれども、業務がものすごく多いので、全く間に合わない、マンパワーが不足したという大きな課題があります。

そういった中で、先ほどありましたけれども、アットマークリアスの鹿野さんから、他市町の先事例などもありまして、仮設の支援連絡員制度が御提案されまして、市でそれに取り組んでいくことになります。

（山崎資料６）行政の他には、社協で、生活ご安心センターを立ち上げまして、そこに生活支援相談員さんが配置され、そちらの方の仮設の訪問とか、民生委員の皆さんの既存の活動の他に、仮設にも回っていただきました。

（山崎資料７）３カ所になりますけれども、介護事業者でサポートセンターを設置しまして、そ

ちらの中で、デイサービスと仮設団地内の見守りとか、あと、イベントなどを実施しながら、自治会の支援を行っています。

あと、他の支援団体ということで、NPOさん、ボランティアさんが、それぞれいろんなイベントをやっていただきました。

（山崎資料 8・9）当初はこれがそれぞれ動いておりましたけれども、見守り体制の再構築が必要だということで、まず仮設については、アットマークリアスさんで支援連絡員を配備して、一手に引き受けるという形になります。毎日の見守りと声掛けということで、元日を除いて、毎日とにかく全ての仮設団地を巡回していただきます。それから、仮設の自治会活動の支援、先ほど言った、いろんな情報の行政のつなぎということになります。

こういったことを受けまして、社協さんの生活支援相談員とか、行政の生活応援センターは、徐々に仮設からみなし仮設とか、被災者支援に軸足を動かすことになります。

ただ、課題として、ずっと今も継続してあることについては、見守りを拒否する世帯があります。訪問などは要りませんということで、ここについては当初、全く行かないという状況でしたけれども、そういったところに限って、いろんな事件がありましたので、声は掛けないのですが、郵便物とか洗濯物の状況は常に確認して、異変があったならば、いろんなところに連絡するという流れになっております。平成28年度からは、週2回ですけれども、復興公営住宅の訪問を実施している状況です。

（山崎資料 10・11）それぞれの見守りのことについては、こちらになりますけれども、この中で、それぞれ似たようなことをやっておりますが、そういった支援が上手く調整できるように、生活応援センターが主催して、エリアミーティングといって、その地区の見守り状況をどうするかということで、それぞれの役割分担などを確認しています。

お茶っこサロンということで、サロン活動は社協さんが中心になって、どこの仮設に入るといった調整をしているのですけれども、そちらに行政も入っていろんな意見交換をしています。

（山崎資料 12）最後ですけれども、今後の被災者支援の重点事項になります。

仮設住宅の入居期限ですが、釜石市の場合は5月から8月にかけて迎えているということで、期限が来た方々は計画どおり再建して、仮設を出ていただけるような応援をするというのが大きな流れになっております。ただ、まだ土地の引き渡しを受けていない方などもありますので、今は、特別に延長できるという制度になっております。

（山崎資料 13）復興公営住宅等、新しいところでのコミュニティ支援は、我々の部門ではありませんけれども取り組んでおりまして、仮設住宅で自治会活動等を行った方は、そちらでもキーパーソンとして、今活躍しています。仮設の活動が自信となっているのではないかと考えております。

もう一つ大事なものは、仮設の支援の中で、我々行政だけではなくていろんな団体の支援をいただくことが非常にありがたいし、助かることを十分認識しましたので、今、復興公営住宅の自治会の立ち上げ等については、市の社協さんとかNPOの支援団体さんが中心になって交流会を実施しており

まして、我々としては、最終的に自治会を立ち上げたいという目的がありますけれども、交流会を何回か開いてそういった目的に向かって進めているところになります。

先ほど言った生活応援センターは、既存の自治会が弱体化しておりますので、今、そちらの再構築にも取り組んでいるところになります。

以上になります。（拍手）

○司会：鹿野様、山崎様、ありがとうございました。

それでは、ここで、11時20分までの休憩といたします。休憩後には、パネルディスカッションとなりますので、登壇者に質問してみたいことがございましたら、お配りしております質問シートに記入の上、係員に提出をお願いいたします。

（休 憩）

○司会：それでは、これからパネルディスカッションに移らせていただきます。

ここからは、コーディネーターを務めていただきます、NPO PLUS代表の齋藤美佐様にバトンタッチをしたいと思います。齋藤様、よろしくお願いいたします。

○齋藤氏：ありがとうございます。ここからは、パネルディスカッションになります。

私は、齋藤美佐と申します。コーディネーターとして、精いっぱい努めますので、最後までお付き合いください。

自己紹介につきましては、皆様のお手元の資料の4ページ、5ページに、本日の登壇者を始め、私のプロフィールが載っておりますので、ご覧いただければと思います。着座にて失礼いたします。

本題に入っていきます前に、まずは本日、全体で素晴らしい事例発表をしてくださいました登壇者の皆様、これまでの御苦労はいろいろあったと思いますが、活動をされてこられたこと、また、事業を含めまして、先ほどの発表のお礼も込めて、登壇者の5名の方に、皆さんで大きな拍手を送りたいと思います。ありがとうございます。（拍手）

さて、今日は表題にもありますように、コミュニティ形成について、協働の在り方を探りましょうというテーマになりますが、今、皆さんに顔を上げて、前を見ていただきたいと思いますけれども、行政と市民活動の皆さんが並んで座っている姿は、正に市民協働です。

ここで1つ御説明したいのですが、菅野さんが悪いわけではないので、飯舘村さんは、たまたま御都合が合わなくて、決して拒否されたわけではないので、そこは皆さん、誤解のなきよう広い心で理解していただきたいです。

協働については、NPO法ができて15年以上経つのですが、私がNPOを始めたときに、こういうNPOの者ですがよろしくお願いしますということで、名刺を持って福島県庁に行きました。何だこいつらという感じで、名刺を受け取ってもらえませんでした。そんな時代から比べれば、今はこうして並んで座っていただけるぐらい協働が進んだということで、今日は、本当に素晴らしい姿を拝見した

と思っております。

それにしても、いろいろとあったと思うので、今からその辺りを皆さんの御経験の中から、お聞きしてまいりたいと思います。

今私が言ったように、昔は、NPOなんて面倒臭いから付き合いたくないみたいな、行政さんにはよく否定をされてきたのですが、先ほどの事例発表を通して見ても、素晴らしい取組をするまでには、何かコツがあったと思うので、まず始めに、行政の方が協働事業に取り組むとき、NPOさんと円滑にやっていくためにどのようなコツがあったのか、どのような御努力をされたのか聞いてみたいと思います。

山崎さんの発表は、連携・協働への積極性が非常に伺える発表だったと思うのですけれども、いかがでしょうか。

○山崎氏：釜石市の場合は委託事業なので、若干限定的なお話になりますけれども、市として、最低限これだけは取り組んでほしいということを明確にしてお願ひすることが大事だと思いますし、その中で、NPO側がある程度自由度があって、工夫がいろいろできる余地があれば上手くいくのではないかと思います。

今我々が一番考えているというか、気を付けているのは、いろいろ制約はあるのですけれども、できるだけ情報提供をすることです。今、我々とアットマークリアスさんで取り組んでいる仮設の関係の見回りなどは、最終的には入居している方々の命に関わることになりますので、そういったときに情報が滞っていたりすると、大変なことになるのではないかと思いますので、常に情報共有できるように、我々としては気を付けてやっております。

○齋藤氏：情報を受ける側も発信する側もということで、大切な情報共有というのは、なくてはならない不可欠なものということが再確認できると思います。

難波さん、先ほどの報告の中で、初めから対話ができていたのか、いいえ、残念ながらという画面が出ていたのですけれども、いかがでしょうか。

○難波氏：協働することは、初めから上手くはいかないのです。そこで、ポイントというか、気を付けたんと思っていますことで、大きく分けて3つぐらいだと思うのです。

課題とかニーズは、今の時代多岐にわたる多様な形なのです。だから、先ほどの事例報告の中でも出ていたとおり、行政だけでは無理なのです。そこを行政側もきちっと認識することによって、連携が必ず必要だということを意識しながら対応すると全く違います。

対応するときに、排他的にならないことを意識しながらお話をきちんと聞いてから判断することが必要です。こういうものですよと言ったときに、余計なものが来たみたいなことになりがちなのです。そうではなくて、先ほども言ったとおり、連携できる可能性があるかもしれないということいろいろな話を聞くと、違うことが見えてくると思います。

もう一つは、住民の方々だったり、NPOさんに、行政側でのキーマンとなる職員を見付けていただくことが、連携を進める上で非常に重要なのではないかと。担当部署でなくても、そういうところ

と連携していくべきだと考えている職員は必ずいるはずなので、その方を一早く見付けることです。その方を見付けて、担当部署に行くときにその人を連れて行き、まずは話だけでも聞いてみてという部分から入るか入らないかでは、全く違うと思っております。

○齋藤氏：ありがとうございます。取り組まれてきた生の声を聞きました。

今とても大事なキーワードが出まして、多様性の必要さを認識するところです。自分たちが自分だけでは頑張れないから協働するのですけれども、そこだけで終わらないで、更にそのステークホルダーを広げていくところが本当に大事なのかということは、今の発言にあったと思います。

また、可能性を見出そうとして話を聞いてくれるというのは、こんなに嬉しいことはないと思うのです。そういう心構えというか、気構えがお互いに必要なのかというところがわかって、そういうところにコツがあって、実際の事業が円滑に進んだことがわかりました。ありがとうございます。

今度は、NPO側も努力をしなければいけないところで、NPOの皆さんに、協働事業に必要不可欠なのは信頼関係の構築なのではないかと思うのですが、信頼関係はどのように築かれて事業に取り組めたのか、コミュニティ形成ができたのかというところで、お聞きしてまいりたいと思います。

最初に、鹿野さんからお願いいたします。

○鹿野氏：行政との信頼関係は難しいです。1つには、NPOの活動を通じてというか、様々な人たちとの関わりの中で学んできたことですが、片仮名で言うと嫌われてしまうのですが、アウトプットではなくてアウトカムです。それをすると、何がどうなるのかということを常に考えています。例えばこういうときに、場をつくりました、それでという話なのです。同じことを行政さんに持っていくます。場をつくりたいのです、それで何がどうなるのか、ここをきちんと考えることだと思っています。

もちろん同じ地域に住んでいるという関係性は、ベースとしてはものすごく大事だけれども、私たちはこの地域にこういう課題があると思っています、どうですか、確かにそうだ、ここが信頼関係の一番の元なのではないか。我々は、ここが課題だと思っているから、こういうことをやりたいのだけれども、行政だけではなくて違う人に話をしたときに、私はそうは思わないという人とは組めないではないですか。そこなのではないか。

もう一つは主語です。話をするときに「私は」ではなくて、「この地域は」という主語で必ず話をすることを心掛けてきたつもりです。

○齋藤氏：ありがとうございます。

横文字は嫌われると言いましたけれども、アウトカム以外に成果とか、そういうものがきちんと出てくる。インプットだけを一生懸命やるだけではなくて、アウトカム、形にして、成果を表現するところですが、その先に評価があって、お互い評価して、それを可視化する、見せて、それを共有する。共有は、できれば自分たちで納めないでそれを公表して、みんなで評価について意見を出し合って、次にブラッシュアップして、更に活動していくところはとても大事な流れを組むことで、信頼関係をお互いにつくれるということで、大変ロジカルな話だったと思います。ありがとうございます。

います。

それでは、菅野さん、いかがでしょうか。

○菅野氏：私どもは飯舘であります、ふくしま再生の会は250人以上の会員で、次から次へと増えております。

私どものNP0の目的は、産業と生活の自立再生なのです。広い分野なのです。今日は、その一部の健康に関する部分の活動のみをやりますけれども、常に住民の自立再生のために何が必要かということを中心に、私のところを拠点として、小さなところから出発をして、次から次へと住民が参加をして、輪がどんどん広がっています。それが大事な原点にあります。

住民が自立再生に必要なものに寄り添ってNP0が関わる、その部分だと思います。協働して一緒にやって行動することの大事さ、先走ってやることはしません。住民に何が必要なのかというところをまず原点に置きながら、行政に情報やデータを提供しながら、今後のことを考えて対応していくこととなります。

○齋藤氏：ありがとうございます。

正に住民参加ということで、市民の顔、いわゆるNP0の活動は、どうしても自分たちの活動に夢中になってしまって、どうやったらこの事業が、若しくは今日の仕事はどう昇華されていくかみたいなところに走りがちなのですけれども、その先にある受益者、市民の顔が見える活動を積み重ねていくことで、信頼関係をしっかりと獲得していくことなのか。何のために、誰のためにということ、菅野さんは、常に強く意識していらっしゃるということがうかがえました。ありがとうございます。

それでは小野さん、いかがですか。

○小野氏：先ほどうちの東松島の難波がお話しましたが、最初、住民と行政は対立するような形で、まちづくりに関わってきていたのです。行政で、住民はどんな話をしたいのか、どんな要望をしたいのか聞く場面があったのです。住民はいっぱい答えました。国からの予算は、土地を造成するための予算しかないから、皆さんの要望はその予算には当てはまりませんということでした。それだったら、最初から聞くなという話です。

一番わかりやすいのは、住所変更をして、あおいという名前に変えます。それを住所表記にしてくださいという要望を出したのです。そうしたら、その担当の偉い方ですが、できない理由を5項目挙げてきたのです。できない理由ではなくて、解決すればできる理由なのです。行政の内部で、難しいことを5項目挙げただけなのです。民間企業の私たちから見たら、そんなことを言ったら、お前は首だというのは当たり前なのです。

それをどこまでできるのかということで改善をしていただいて、100%はできなくても70~80%までできたのならその答えでいいのです。あとの足りない分は、住民を説得するのは、行政と私の役目だということで、信頼関係を築いていったのです。そこからは比較的上手くいくようになりました。そんな関係をつくっていきました。

○齋藤氏：ありがとうございます。

すごく生々しい話ですけれども、どうしてもこれは致し方ないし、行政は予算ありきで動くのは百も承知なのですけれども、できない理由の説明の仕方1つで、お互いに距離感が全く違ってきってしまうことと、住民側も町内のいろんな仕組みや事情、いわゆる組織で動いていますので、それを余りにも理解し過ぎてしまうと、そこで住民の声が反映されないこともあるので、小野さんのように諦めないで対話をし続けることが大事です。その先に、必ず信頼関係が待っていると伺えました。ありがとうございます。

今出てきたように、菅野さんも強くおっしゃっていましたが、コミュニティ形成には、市民の主体性が一番大事、肝心だということなのですが、それが今日の事例発表としても、皆さんの中で確認ができたのではないかと考えているところなのですけれども、NPO側からの協働で、例えばこういうことをやりたいということに対しての事業提案で、行政に事業提案をするタイミングとか、行政のどこに対して窓口がどこだったのか、若しくは先ほど難波さんからお話がありましたけれども、行政サイドで、どんなキーパーソンがこういった事業に取り組むべきなのか、また、行政側のお二人には、どのような事業提案のされ方をすると、協働しやすいのかという点を聞いてみたいと思います。

それでは、まず行政サイドの視点からお伺いしたいのですけれども、難波さんいかがですか。

○難波氏：行政というのは、議会对応でかなりの時間を割くし、かなり苦慮する形なのです。だから、NPOさんがアプローチをするときに、協働しようと思った職員に対して、議会で説明できるような資料だったり、そこと組むべきなのかという部分のデータとか、基本的にそういったものをきちんとそろえて持っていくと非常に受け入れやすい形が生まれます。

もう一つは、先ほど言ったことにもつながるのですけれども、担当部署に直接行くという形もあるのですが、そこが受け入れがたい感じだと思ったら、先ほど見付けたキーマンとなるような方にちょっと助けを求めながらいかないと、完全に排他的になっている方に対していくら推しても厳しいところがあるので、そういった形でいったらいいのではないかと思います。

○齋藤氏：ありがとうございます。続いて山崎さん、いかがでしょうか。

○山崎氏：先ほどもちょっと出ましたが、行政課題をきちんと認識しているのかということが重要だと思います。それも深く理解していればしているほどいいのか。それを解決するためのマッチングの提案をしていただくことです。

特に行政の課題として認識しているのだけれども、なかなか手が回らない事業というのは、実際にあります。その辺のところを御提案いただいて、更に数字で示せるようなものがあれば、なおいと思います。

○齋藤氏：ありがとうございます。今、身近な方に、こういうことをやりたいのですと言ったときに、ずっとその先にお認めいただかなければいけないところがあるので、そこにきちんと説明ができるような形で、体裁を整えておくことと、あと、山崎さんがとても大事なことをおっしゃってくれて、一定の数字目標に表せるものは、きちんと目的と数字で表せるものであれば、数値目標などをしっ

かり盛り込んで、一緒にやりませんかという呼びかけは大事です。ありがとうございます。

今度は、NPO側としてはどうでしょうか。小野さん、いかがですか。

○小野氏：今、社協さんが訪問見守り活動をやっているわけなのですが、私は、それが新しくできたあおい地区ではどうなのか。住民の高齢化だったり、先ほどお話をさせていただいたのですが、独居率だったり、それに対して回数としてどれぐらいの頻度でやっているかということ进行分析しました。

私たちは、土曜日日曜日も含めた365日、住民が見守りをするのが一番正しい方法なのではないですかということで、福祉の方、社協の方、それと、コーディネートしてくれる学校の先生方、そういった方々と一緒になって勉強会をやったのです。そこがスタートで、それが行政でも、そのやり方が最終的には一番いい方法につながる、地域でやるということは最終的な地域包括ケアにも、今、国が目標としているものにもつながっていくということで、そこからスタートしておりますので、もしかしたらそんなタイミングといいますか、ケアの仕方がいいのかと思っております。

○齋藤氏：ありがとうございます。それでは菅野さん、いかがですか。

○菅野氏：飯舘は、昨年解除になったばかりです。その飯舘の自立再生の在り方について、動き出したばかりです。ですから、先ほどから出ていますとおり、それぞれができる部署で提案しながらやっていく。

私どもNPOの立場からは、住民サイドから必要なものを、要するにこの地域にはこういうものが必要なのだということを率先して提案をしながら、地域の方、あるいは組織の方と連携をしながら、行政と一体となって取り組み、新しい情報を常に発信して輪を広めていくことが大事だと思っております。住民に寄り添った対応という気がします。

○齋藤氏：最後ですけれども、鹿野さんお願いします。

○鹿野氏：いくつかあると思っています。どこに持っているのか、どのタイミングかみたいな、正直なところ、いくつかあると思っていて、これを全部話すと1時間ぐらいかかってしまいます。

1つには、NPO云々とか、震災云々ではなくて、以前からの商店街活動も含めて、行政さんとは、いろいろと関わりを持っていて、助成金とか補助金なども含めてあります。いろいろ話をしている中で、今ではなくて過去ですが、行政さんというのは、最初はいい話をするのに一番最後にはしごを外すのだらうという経験を何度もしました。今振り返ってみると、はしごを外されているのではなくて、行政さんがやれない手法を提案していました。

行政さんは、先ほども言いましたが、議会で承認されたことしかやってはいけないと言われていきます。それから、予算を目的外使用すると、最近はいろいろありますけれども、捕まったりもします。がんじがらめで、やれることがものすごく少ない人たちなのだという理解をするようにしてきたのです。

なぜかという、腹の中でこなしてしまうと頭にこなくなるのです。行政の人たちがみんなで融通を効かせ始めたら、よく言います。そんな杓子定規ではなくて、もう少し裁量を持ってやれない

のかと言うのですけれども、今いる行政職員さんが、みんな裁量を効かせてしまったら、行政は崩壊します。そういうふうに、自分の中で落とすようにしたというのが1つだと思います。

その中でもう一個は、釜石市役所の方と話すときは、釜石市民としてと言いますけれども、岩手県の職員と話すときは、岩手県民として言います。国の方と話すときは、日本国民として言います。釜石市民と言わないのです。釜石というところの日本の国土を何とかしてくれませんか、防潮堤の話などは、国の人とはそういう目線で話をしました。

あとは、議会サイクルをきちんと勉強する。自治体さんを含めて、お金の流れはどうなっているのだろうということをまず理解することだと思います。間違っていたら申しわけないのですけれども、釜石市の議会は6月、9月、12月です。3月は定例会なので、議会にのって承認されて、予算が降りるまで、どんなプロセスを踏むのかを勉強するわけです。そうすると、先ほど言いましたキーマンを見付けて、例えば主査、係長、課長、部長などと上がっていくのに、どのくらいの時間がかかるかといったら、ここの感覚でいうと、来年4月から事業開始しようと思うのだったら、前の年の7月ぐらいまでの部内でのサマーレビューの前までにキーマンを捕まえて、素案でいいので事業提案をぶつけます。上に話をしてみるみたいなのところ、そういうタイミングは、1つあると思って、戦略的に考えていくみたいなことだと思いますが、努力しているつもりでいます。

○齋藤氏：ありがとうございます。協働と言っても、いろんな認識が必要だというのは、皆様の御発言を通して、改めて感じたところですが、分析をしてという言葉があったのですが、NPOとか民の活動は、分析が不得意なところが多いような気がします。これまでどうだったのか、だからこそ今、こういう課題があるのだというところを、しっかりと分析することは本当に大事だと思いますし、住民サイドのニーズをしっかりと把握したら、それを発信し続けることも大事だと思います。

鹿野さんのお話を聞いていると、議会サイクルを認識するというのは、民の活動をしていく方たちには、そこまで認識がいていない、意識が及んでいないと思うのですけれども、議会サイクルとお金の流れをしっかりと学んでいく必要があると思いましたので、いずれにしても、NPO側としては、戦略という戦うみたいなイメージになってしまうので、工夫をして、その事業だけではなくてその先に何が起きているのかという先読みをする力も必要なのか。むしろ先読みがしっかりできていると、行政サイドも、お話を聞く耳を持っていただけたらと思いますので、今後の協働に、そういった点も活かしていただけたらと思います。ありがとうございます。

さて、時間もどんどん過ぎておりますが、今日の会場は、社長の皆さんとか、復興支援のNPOの方々もたくさんいらっしゃるということなので、今日の事例発表の中から具体的なところをピックアップして、活動しているお三方に御質問していきたいと思います。

まずは菅野さんですが、健康ケアとして、第1回の「健康いちばん！の集い」ですが、飯舘を会場に開いたことに、大変意義があったと思うので、成果があったのではないかと思いますので、そのときの参加者の皆さんの様子や声など、もう一度お聞かせいただけないでしょうか。

○菅野氏：私どもの再生の会は、どちらかというと事業の部内には、そこには趣を置いておりません。住民と一緒に活動することが主です。ですから、健康ケアについては特に重点を置いた活動です。そういう気持ちを中心なのです。

充実したケア活動をずっと積み重ねてきて、今度は社協も一緒になってやっていただきました。そして、老人会の連合会、その方々も一緒になってやるような形になってきて、どんどん強くなって行政を動かしていく、そういう部分になってきたと思っています。まだ入り口の部分ですが復興に向けて、飯舘村という国土で、新しい形の風土がつくり上げていけるとと思っています。

老人の人たちが集まってきて、「お久しぶりです、太ったのではないか」とか、「今どうしているの」とか、心の悩みなど、気兼ねなく口にされてます。ケアする皆さんが持っている英知を、飯舘村に集中してやってもらっているという部分は力強いです。協働の在り方というのは、そういうところからなのですが、これらの気持ちが村民にも伝わって、次から次と輪が大きくなっていくのではないかとと思っています。これから2カ月に一遍、村一円の会場ということで開催され、来年に向けて、前向きな部分が出てくると考えています。

○齋藤氏：菅野さん、先週ぐらいに第1回を開いたばかりでほやほやですね。参加された方たちは、先ほどの発表の中で、行く手立てがないところを解決して、ようやくたどり着いて、参加された方も多かったと思うのですが、参加された方たちは行こうかと言っているときと、実際に来て、一緒に動いたりして、そのときの変化とかお声はありましたか。そこも教えていただけますでしょうか。

○菅野氏：そもそも最初に来るときには、結局誘われてくるという部分は強いです。でも、来た後には、みんなでこうして会えて良かったということで、率先して明るく声を出したり、楽しんだりしています。そこに心の強さというのか、そういうものが湧き上がってきて、一人ひとりの考え方は全く違うと思いますけれども、それぞれみんなが集まって、声を出し合って楽しさを感じとっておられると思っています。

これはお年寄りだけではなくて、若い人もそうなのですが、何といたしますか、世話をする人たちも特に感じとっているように受け取れます。

○齋藤氏：ありがとうございます。新しい風土という言葉が生まれてきて、新しい風土という言葉は、みんなをととても前向きにさせてくれると感じました。

それでは小野さんに、発表の中で盛りだくさんのいろんな取組をされてきたように感じましたけれども、小野さん御自身は当事者でありながら、皆さんとともにいろんな取組をしてきた中で、5つの目標を最初に設定したことがとてもよかったのではないかとっていますが、小野さんが一番印象に残っている事業などがありましたら、お聞かせいただけますか。

○小野氏：一番最初ですが、仮設住宅の自治会として、仮設住宅に住んでいる方々を何とか自立するまで、住んでいる間、みんなで楽しくやりましょうということで、いろんなイベントをやってきたのです。当初はNPOさんだったり、いろんな支援団体さんが自分たちの思いで来て、こんなことをやりますということを受け入れるだけだったのです。

その年の12月から、自治体主体で何でもイベントをやる、それに足りない部分をいろんな支援団体さんをお願いをして一緒にやっていきたいと思いますということをやってきたのです。ですから、12月には、クリスマスパーティーを3週連続でやったりとか、翌年には、100人で36メートルのものをつくります。

8月には、青森からねぶたに来ていただいて、今も続いているのですけれども、第1回のときには、仮設住宅に住んでいる方は1,200人ぐらいしかいないのに、何と10倍の1万2,000人ぐらいの方が参加してくれたのです。今年も、8月18日の土曜日に、あおい団地でねぶた祭りをやります。昨年は8,500人が参加してくれました。これが今までやった中で、ずっと継続してやってこられてよかったのです。

新しい団地の中では、あおい農園をやりますということで、高齢者で元気な方に集まってくださいと言ったら、手を挙げてくれた方は、今52名の方が手を挙げてくれているのです。

今後、これが上手くいくようにということで、今この2つが一番いいと思っています。

○齋藤氏：ありがとうございます。みんなで楽しくやりましょうということが具現化されて、一度、楽しい経験をした人たちが、更に継続して次の年もということで、新しい文化が生まれていくようです。

先ほど同じテーブルについているときに教えていただいたのですが、今お話には出てこなかったのですけれども、弟を思って青いこいのぼりを掲げているという取組は、80センチのこいのぼりを、各おうちの前に5月に立てるそうです。素晴らしい一体感も生まれて、その後のいろんなことの垣根がとれて、居やすいということと、青いこいのぼりがぼろぼろになってしまったりすると、今、難波さんが首からかけているブルーのマスコットみたいなものがあるのですが、これはこいのぼりの生地で作られているそうなのです。さらに、端切れが出ると端切れを魚の形に切って、しおりをつくっているのですが、そのしおりは、どこがつくっているのですか。

○小野氏：埼玉県東松山市です。

○齋藤氏：埼玉県の高校生がこれをつくってくれているという、そういった地域を越えた形での交流も行われているということで、新しいことをつくろうというところの丁寧な、きめ細やかな取組だと思ったので、紹介させていただきました。ありがとうございます。

それでは鹿野さんのお話に移りますが、タブレットを活用した情報共有は、端末機を使うということで、今の時代の流れからいうとありですということなのですが、それにつけても、本当にすんなりうまくいったのですかと、私はちょっと疑問に思ったので、何か苦労されているのではないかなと思ったのですが、その辺りは鹿野さん、いかがでしょうか。

○鹿野氏：もちろん最初から上手くいくはずなどないです。一番最初は、うちの連絡員が紙を持って巡回をして、事務所に戻ってきて、若しくは人数も多かった集会所に常駐という形でスタートしましたので、自分が担当する仮設団地の巡回をした方に、集会所でそれを紙にきちんとまとめて、それを事務の人がエクセルに全部入力していくみたいなことをやっていました。とてもではないけれども、毎日66団地分の集計をしていくのは難しかったのが1つです。

次に、NTTドコモ東北さんであれば、タブレットを活用したオリジナルのソフトウェアを作成して、御支援させていただきますという話があったので、オリジナルのソフトウェアを開発していただいて、最初はそれでやっていたのです。なぜそうしたかという、高齢の方は操作が覚えられないので、手でできること、できる限りタッチしていだけで次へということで、最後も選択肢で、ボタンで全部完結するものを求めたのです。

これでやっていたのですが、時間経過とともに、仮設団地での団地間の移動とか、抜けました、入りましたというときの基礎データの入替えに、オリジナルのソフトウェアというのは結構時間がかかるのです。使い勝手はいいのだけれども、毎日の動きに対応し切れないということで、凡庸性のある一般的な使われているものということで、今のシステムに落ちつくという3段階があります。

なぜこれをやらなければいけないのかというところの意思統一でいくと、先ほど仮設での事故みたいな話がありましたけれども、私は民間人なので言ってしましますが、例えば自死であるとか、孤独死であるとか、救急車が来たとか、何かあったときに、過去にさかのぼったデータはすぐ必要になるのです。警察さんもそうだし、前回どうだったというときに、紙で書いたものは、とてもではないけれどもその情報を出すのに手がかかるので、そこだったらといって、そのデータを見ればさかのぼった情報をすぐにお渡しできるので、必要な対応を行政さんも含めて、すぐできるということを目指さなければいかぬのだと思います。これが次の防止に役に立つのだということで、この1点をきちんとうちのスタッフにも共有する形で、必要なら覚えるしかないと言いながら、勉強をしています。

○齋藤氏：ありがとうございます。緊急時のときに役に立つ日頃の巡回だと思うのですが、そこを更に防止するところに、先ほどの先読みではないのですが、その先に何が生まれてくるのか。正に鹿野さんの言ったアウトカムというか、成果のところにつながっていくと思うのですが、そういった成果の広がりも、可能性を広めてくれたのは端末機の使用だったと思うので、そこだけで1時間ぐらい話を聞いてみたいという気持ちですが、この後交流会もあるようなので、個人的に聞いてみたいというか、是非鹿野さんのグループに入って、聞いていただきたいと思います。3つのそれぞれ現場に行っておられる3人のお話を聞かせていただいて、今日は良かったと思います。

残り10分を切ってしまったところなのですが、よくありがちな形に流れているパネルディスカッションは、一方的に聞いたことに話しているという流れは、私もこれでいいのかと時々思うってしまうぐらいなので、短い時間を取りまして、お一方ぐらいになりますか、登壇者の中で私も聞いてみたいという質問を1回だけ聞いてみたいと思うのですが、フロアの皆さんと共有できるような御質問で、どなたかいらっしゃいますか。

それでは、鹿野さんから、登壇者のそれぞれの皆さんに、どういったことをお聞きになりたいですか。

○鹿野氏：私ばかり話をしているようであれなのですが、昨日、飯舘でやったときに、うちのスタ

ツフも参加させていただいたのですが、帰りに送っていくときに聞いたのですが、岩手でも、内陸に避難している人たちがいるのです。もっと遠くに避難している人たちもいるのです。沿岸の自治体ではなくて、北上という内陸なのですけれども、盛岡に沿岸被災者向けの復興公営住宅を設置するというので、コミュニティ形成みたいなことが難しいという話になったときに、よくある成功事例は、それを真正面から引っ張っていけるあの人がいたからできるのではないかという話がよくされているのです。

あの人なのですけれども、そうではなくて、自分がいなかったらどうだったのだろうみたいな、どういうやり方をするとキーマンは生まれてくるのだろうみたいな話で、小野さんもそうなのですが、明日私が倒れたらこいつみたいな、その辺の話を聞けるといいと思ったのですが、どうでしょうか。

○齋藤氏：わかりやすそうで難しい質問のような気もしますが、山崎さんから、行政サイドなので、例えばキーパーソンが鹿野さんになっていたとすると、鹿野さんがもし関われなくなったときとか、どういった人が出てきてくれたらいいと、要望でも希望的なお話でいいのですけれども、お聞かせいただけますか。

○山崎氏：考えつきませんけれども、ちょっと難しいお話だと思います。代わり人は違うタイプの方なのでしょうから、いろいろあるのではないのでしょうか。

○齋藤氏：日頃一緒に走っている方は必ずいるわけで、まずはそこからということに行政サイドとしてはなります。菅野さんはいかがですか。

○菅野氏：難しいです。

○齋藤氏：難し過ぎますか。小野さんはどうですか。

○小野氏：私の場合は例えば、仮設住宅に入って自治会長をやってくれと言われたときに、ずっと断っていたのです。私はそのときは、健康面に不安があったのです。2009年にがん摘出の手術をしているのです。その後に、抗がん剤治療を1年間やれと言われたのですが、副作用がものすごくひどくて、先生に、半年でやめてほしい、がんで死んでもいい、ノイローゼになって自殺はしたくないということでやめたのです。2011年の1月に再発をして、2回目の手術をしているのです。

その後に3月の津波ですから、仮設住宅に入ったのが6月末、7月初めだったのです。自治会をつくりますという活動が始まったのは、8月の初めぐらいだったのです。私が1カ月に一遍の診察に行っているときにその活動があって、私が欠席裁判でなったのです。普通になったわけではないです。

ただ私は、こういう健康状態だということは皆さんに言っていなかったもので、でも2週間ぐらい待っていただいて、私より一回り上の方なのですけれども、この方が副会長を引き受けてくれるのだったら、私はやりますということで、その方を指名したのです。

その方は、私の近所に住んでいて漁師をしていた方なのです。ですから、船に乗っている方は、一番偉い人ですから、私よりも12歳上の方で、その人に、お前これをやれと言われたら、みんな言

うことを聞くわけです。私にとっての水戸黄門の印籠役をやってくれということで、その人に頼んだのです。ですから、そんな関係があつて、私みたいな若造が皆さんに言っても、脇に偉い人がいるので、もしかしたら言うことを聞かないとこの人に怒られるというイメージを持っていたいたのか。私はそれを狙っていましたが、そんなことでした。上手くいったと思います。

○齋藤氏：ありがとうございます。欠席裁判という話になりましたけれども、欠席裁判も、いないからこの人というのは、PTAの役員決めぐらいなもので、この人だったら絶対にやってくれる、一緒にやれるという人で、多分小野さんは選ばれたのではないかと想像をしました。

難波さんは協働の経験も多いと思うのですが、必ずキーパーソンに共通する何か特徴的なことはあると思うのですが、その辺りはどうですか。

○難波氏：小野さんの欠席裁判の場にいたのが、私だったのです。その当時も、前の前の部署が市民協働課というところで、仮設住宅のコミュニティが大切だということで、自治会を何とか立ち上げようということで、ただ我々行政側も、誰というのがよくわからないという状況の中で、小野さんのこともよくわかっていなかったのです。

なので、どうします、誰にやってもらえますかとか、誰にしましょうかといったときに、何人が挙がった中で話が出てきて、その中で小野竹一さんがいいのではないかと言ったら、そうだという声が上がってきて、私は、小野竹一さんはここにいるのですかと言ったら、いないということで、大丈夫なのですかと言ったときに、誰かが小野さんを説得するから任せとけみたいな形で、多分説得されたのです。そういうことで、まだ発掘されないで残っているというか、そういう方々もいっぱいいるのではないかと思います。

○齋藤氏：小野さんが、私のような若造がと言っていましたけれども、皆さんの頭の中での若い人はどんな若い人なのかと疑問に思うのですが、ボランティア大会がそれぞれの地域で行われますが、そこに入ったときに、後継者が出てこないというのはどこに行っても課題なのです。皆さん、地域でいい活動をたくさんされているのです。

でも、その担い手とおっしゃるのですが、皆さんがここに関わったとき、おいくつでしたか。そのきっかけは何だったのですかという、50歳半ばにしてとか、60歳で定年を迎えてということもあって、すごく若い人が来てくれたら、いろんな刺激にもなって楽しい、活力も湧き上がると思うのですが、これまでもつないできたということは、これ以降もつないでくれる人は、必ず出てくると信じていて、人が一番大事ですから、そこは外せないと思います。

こういう活動は、課題に気付いて旗を上げた人が、何といても一番偉いと思うのです。けれども、1人では頑張れないので、2番目にいいことをやっている、一緒に応援する、一緒にやると言ってくれた2番手がとても重要で、活動を進めるときにそういう話をして、そこからムーブメントが起きていって、市民活動がというお話をよく言われるのですけれども、トップにいる人たちは、2番手、3番手を少し頭に浮かべておくことも大事なのかと思いました。

鹿野さん、このような話でよろしかったですか。

○鹿野氏：ありがとうございます。課題が共有できただけで、すごくいいと思っています。

○齋藤氏：ありがとうございます。まだまだ聞いていきたいのですが、予定の時刻を少々過ぎました。2～3分いただきまして、最後に今日、釜石市と東松島市の4名の方は昨日から福島の飯館にいらっしゃって、昨夜はこちらにお泊まりになったのでしょうか。行政の職員の方が2日もNPOのために空けてくれるのは、すごいと思います。菅野さんもちろんなのですが、今日、フロアの皆様といろいろ共有してきましたが、最後にメッセージなどをいただければと思っております。

時間も過ぎていきますので、一言ずつ回していきたいと思います。難波さんからお願いします。

○難波氏：今日は、ありがとうございました。私もこういう場に出るということは、自分の振り返りにもなりますし、非常に勉強になるということで、私自身も神戸などに招かれていまして、いろいろな事例を知りまして、丸飲みはできないのです。地域に合った形があるので、ヒントをいただいて、それをいかに地域に落とししていくかというところを考えていることが、非常に大きな力になります。

今日もいろいろな形で話が出ましたが、先ほども出たとおり、あの人がいないとできないのではないとか、この地域だからこういうことができたという話ではなくて、いろんなところで、いろんな形でエッセンスを用いてやれるという形は絶対あると思っていますので、皆さんもこれから頑張っていたきたいと思います。

○小野氏：私からは、住民の声を行政に届ける。それはものすごく大事なのですが、ただ、その要望が個人のわがままではなくて、公平な立場で住民が望んでいるということであれば、難しいことであっても困らせる意味ではなくて、行政にどんどん届けていただいたほうがいいと思います。

それと最後に、私のやっている活動ですが、パソコンを全くやりませんので、うちの事務局でやっているのですが、Facebookのメールアドレスが私のプロフィールに載っておりますので、それを見ていただければ、あおい地区会でこんなことをやっているというのは、随時、載せておりますので、見ていただければと思います。以上です。

○菅野氏：行政サイドから出席できなくて申しわけありません。

生きていく上で大切なものは、人間の知恵で、乗り越えていかなければだめなものでありますし、私たちは、科学技術の活用で、生活を奪われてしまいました。ここに大きな問題があるのです。そこにどう対応していくかというところが大事な部分です。

今度は人間の知恵で、再生に向けて正に不死鳥のごとくみんながよみがえって、羽ばたいて、自立再生していく、そういう気持ちが一番大事なのかと思います。みんなで力を合わせてやっていこうというのが、私の気持ちです。

○鹿野氏：鹿野です。今日はありがとうございました。期待したいことと言えば、地元の人間がと言ってきましたけれども、外からの支援者を否定しているわけではありません。

なぜ私がそれを言うのかというと、震災の後、しばらく忘れていました。2011年3月10日、私は何をしていたのかと思ひ出せない期間がすごく長かったのです。時間経過とともに、だんだん思い出してくることは何かということ、まちの形が変わってきて、瓦れきを取り除かれて更地になって、

新しい建物ができてきてという中で、正直、このまちは私のまちなのかという思いがすごく強くなってきています。

2011年3月10日までの生活をしてきた記憶、これを大事にしてほしいと思っています。3月11日以降、福島はあと何年かかるかわかりません。もしかしたら、違う場所に暮らすことになるのかもしれない。だけれども、3月11日以前の生活と、どういう人とどういう関わりを持って、どういう場所で、どんな営みをしてきたのかという記憶さえ途切れなければ、大括りで言うと、違う場所に暮らしていても、つながりは自分の人生の中できちんとつながっていく。そこが新しくここに住むことになったからここでとスタートしてしまうと、その人たちは、過去がなかったことにされてしまう懸念みたいなものが膨らんでしまいます。

見た目が変わっても、自分がここで暮らしていたのだという記憶が途切れられないような、そんなことを皆さんに心掛けていただきたいし、私はそこが途切れそうになる度に、心が折れそうになっているという実感があるので、もう一度、そこだけを思い返していただきたいことをお伝えしたいと思います。

○山崎氏：釜石市の被災者方々の生活再建は、まだもう少しかかる状況です。ただ、うちの市長は、最後の1人が再建するまで力を尽くすと常々申し上げておりますので、我々も肝に銘じてやっていきたいと思います。ありがとうございました。

○齋藤氏：ありがとうございました。震災が起きて以降、いろいろと複雑化したり、細分化していく課題ではあるのですが、助け合うという意味から言うと、コミュニティ形成がなくてはならないのですが、取り残される人をつくらない、また、次世代に希望をつないでいくという意味でも、今の私たちができることを丁寧に取り組んでいく、そして、協働という手法を使って、確実に形成していくことがとても大事だということを、今日皆さんと共有できたと思います。

最後に、発表、パネルディスカッションに御登壇いただきました皆さんに、大きな拍手を送りたいと思います。ありがとうございました。（拍手）

お昼の時間が押してしまって、大変申しわけありませんでした。これでパネルディスカッションを終了とさせていただきます。どうもありがとうございました。（拍手）

○司会：ありがとうございました。それでは、ちょっと短くなりますが、ここで、12時50分までお昼休憩といたします。お弁当を注文された方は、会場の後ろでお受け取りください。

意見交換会の際にも活用いたしますので、質問シートをまだ出されていない方がいらっしゃいましたら、係までお願いいたします。

（休 憩）

○司会：後半の時間につきましては、約20分間を2回に分ける形にしております。登壇者に質問してみたいとか、話を更に聞いてみたいといったところに入っただけたらと思います。

1回目、2回目、それぞれの意見交換の後に、グループに入っておりますファシリテーターから、どのような話があったか、概要をフロア全体に共有をしていただく流れになっております。

(登壇者との意見交換(1回目))

○司会: それでは時間となりましたので、ここで1回目の意見交換を区切らせていただきたいと思います。
各グループのファシリテーターから、どのような話があったのか、共有をしていただきたいと思います。

始めに、岩手グループのファシリテーターをしております、NP0法人Leafの事務局長の佐藤真平様、お願いいたします。

○佐藤氏: 岩手グループを担当させていただいております、二本松市のNP0法人Leafの佐藤と申します。
簡単ですが、私から岩手グループの中での質疑応答について、発表をさせていただきます。

岩手グループで出た御質問は、タブレット端末を使って、住民の方とのコミュニケーションをしていく中で、こういったリアクションがあったのかというと、タブレットを持つことで、住民の方から距離を置かれたりとか、そういったところの対応をどうされているのかというところがありました。

そこについては鹿野さんから、タブレットを持って、どういうことをやっているかというところの説明をしっかりと、御理解いただくことをしているということでした。

その他の意見ですが、タブレットを使って巡回していくことの目標は、端的に言うと生存確認です。生存確認をしていくためのタブレットの利用なので、例えば事務所に戻ってからの入力であったりとか、そういった辺りを臨機応変に行っているながらの生存確認のミッションを行っているという話がありました。

話題としては、そういったICTの導入のところで、どういう言葉を持っていくのかというところへの関心が高かったです。

その他、釜石市の取組の中で、巡回員が訪問するというサービスの中で、難しかった事例としては、例えば自治会長同士の対立だったりとか、人間関係のところが発生していたということです。

それから、業務の慣れが起らないように、配置替えをしながら行っていた中で、スタッフからのやりにくかったこととか、マネジメントについての共有をしていただきました。

簡単ですが以上です。(拍手)

○司会: ありがとうございます。続きまして、宮城グループのファシリテーター、復興庁の秋田さん、お願いします。

○秋田氏: 復興庁の秋田と申します。うちの班では、大きく2つ質問が出ました。

1つ目の質問として、あおい地区会では、自治会ですとか、地区会の役員の任期・改選はどうなっていますかという質問でした。

あおい地区会の規約では、再任は妨げないことになっていまして、会長をやりたい人がいれば、変わるという流れです。

あおい地区会の中では自治会が、一丁目、二丁目、三丁目があるということなのですが、一丁目から三丁目まで、規約を全て同じにして、うまく意思疎通が図れるようにしているという話でした。

自治会の中の班長さんの選任については、班長は3カ月単位で回すこととしていまして、1つの班は20世帯で班をつくっているのですが、班長、副班長の2人体制で、責任を分担する形でつくっていきまして、かつ隣同士の家にしなくて、あえて少し離れた距離同士の家庭で、班長と副班長という形にして、コミュニケーションを上手くくって回せるような体制をつくったということです。3カ月ごとに、班長、副班長さんは、1,500円を徴収して回って、年間では6,000円徴収するということでした。

さらに特徴的なのは、班が2種類ありまして、1つは、回覧板などを回すような通常の班で、もう一つは、ごみを捨てるための班です。通常の班の端の方にごみ捨てに行く場合、隣の班に捨てに行ったら近い場合があるのでこのようにしているということでした。このごみ捨ての班は、1週間単位で当番を変えて回すという形で、2つの班を設けて、うまくコミュニティ形成が図れているということでした。

2つ目の質問として、今日の発表の中でも勉強会をたくさん開催しているという話がありましたが、行政から声がかかって勉強会をすることが多かったのか、それとも、自治会から声をかけて、勉強会をすることが多いのですかという質問がありました。

結論としては、両方からでして、支援に入っているNPOの方が、こういうことをやったほうがいいということをやったりですとか、行政としても、自治会形成に当たっては、こういったことを学んでほしいということで、勉強会を設けたりということがあったりしました。

勉強会に当たっては、阪神・淡路大震災の事例を学んでもらったりとか、日本一のまちを目指しているということだったので、一番住みたいまちナンバーワンの千葉県印西市、そういったところの方にお越しいただいて、他地域の事例を学びながら、勉強会を進めていったという話でした。

うちの班では以上です。（拍手）

○司会：ありがとうございました。 続きまして、福島グループの齋藤様、よろしくお願いいたします。

○齋藤氏：こちらは、菅野さんのグループだったのですが、質問は2つありました。

1つ目は、人づくりが大事という冒頭の菅野さんの話がありまして、それを受けた形で人が大事ということですが、被災者の方たちの戻る戻らないで、それに村民同士の反発とか、そういうものは、7年間の間にどんな変化がありましたかという質問でした。

菅野さんのお答えですが、飯館は他と違って、1ヶ月遅れの避難ということで、被害者意識が高かったのではないかとこの感覚を持たれています。当初は、受けとめ方もまちまちであり、また、家の中でもばらばらに受けとめているということで、そうとなると、隣同士、村民同士の不

信感がどんどん生まれていったというのです。さらにメディアに振り回されるので、そこに拍車がかかっていくような状況だったのです。

どうやったら不信感を持たないかを考えたときに、正確なデータが欲しい。それも、村民が村民のために測ったデータを発信することが、大事なのではないかとということで、菅野さんがふくしま再生の会を立ち上げたわけなのです。

そのデータを皆さんに発信するようになってから、どういう変化があったのかというと、今は、いろんなことを自分で判断できるように村民もなってきました。そうすると、自分の判断だから、相手の判断とか、意見が尊重できるようになってきた。そこを否定してしまうと、孤独を生んだり、引いては命を落とすようなことにも至ってしまいます。確かなデータを信頼のある人から発信するところを言っていました。

3年目になってくると、お互いを認め合うようになってくると、今度は仕事を見付け始めて、前向きになってくるわけです。そして、生活を求め始めてきた。それは違いを認めることによって、初めて先に進んでいけると、みんなが認識を持ったということなのです。

菅野さん個人にとっては、お孫さんの足が遠のいていたのですが、その中で、最近ではお孫さんが手伝いに行くということで、来てくれることが何よりうれしいというお話でした。

もう一つの質問なのですが、訪問ケアというお話が出ていたのですけれども、具体的にどのような取組をしていますかという質問でした。これは心を開いてもらうようにすることなのだとこのころで、そのためにはよく話を聞くことなのだ、傾聴なのだということところが、真っ先に菅野さんの口をついて出た言葉でした。

そのためには、自分たちだけで頑張るのではなくて、そこにはいろんな人たちが必要なのです。有資格者だけではなくて、その他に、お話をじっくり聞いてくれる身近な人であったりとか、バラエティーに富んだ人たちで、よく話を聞いて支援していきます。

心を開くとどんな効果があるかということ、最初は身近な話だったりするのですが、その根底にある相談につながって行って、課題が解決すると自己肯定も強まって、自殺などの予防になるということでした。

今回掘り起こしがあって、村の中でマッサージのできる人がいたらしいのですけれども、誰もそれを知らなかったのです。この震災をきっかけに、その方が評判を呼んで、必要とされる方になったということで、人材の発掘にもつながっていきます。そのためにも1人でも多く出会っていくということで、出会いの場の提供をやっていきたいとおっしゃっていました。

以上です。（拍手）

○司会：ありがとうございました。続けて、2回目の意見交換に入りますので、皆さん、席をお立ちになって、別のグループに移動をお願いいたします。引き続き、同じ方のお話をお聞きになりたい場合には、そのまま同じグループにいていただいても構いません。

○司会：時間となりましたので、先ほどと同様に、各グループから概要を共有していただければと思います。まず岩手グループの佐藤様、よろしくお願いいたします。

○佐藤氏：岩手グループ、佐藤です。簡単ですが、共有をさせていただきます。

岩手グループで質問として出たのは、今、地域で活動していく中で、団体の規模が大きくなってきたことにより、人員の人材育成、研修に力を入れていく。ただ、その力の入れ方をどういうふうにやっていったらいいのかわからないということで、釜石の事例では、巡回員の方が数多くいらっしゃるって、そんなところで活動をして、その情報を集約している。そこは一定のビジネスマナーというか、住民のマナーが必要ではないかということで、どのように研修されてきたのかという御質問がありました。

鹿野さんからは、基本的には本部機能があって、それと各地に入っている営業的なスタッフに分かれているというお話がありました。本部機能でどういうプログラムがいいのかということを考えるような仕組みになっている。

大きなものとしては、ソフトウェアの会社との関係性があった中で、営業研修のメニューを持っていたことがわかり、それを何とか巡回員のマナー研修、ビジネスマナーのところで活用できないかというところの話がうまくいったそうです。

受け手側も、どういう営業マニュアルが被災地の中で役立つのかというところはわからないし、営業をやっているところが、研修を被災地バージョンにできるとは限らないのですけれども、そういったことも、釜石の場合は、一例としてやったということです。

そういう中で、例えばコンプライアンスとか、企業の中ではちゃんとノウハウとされているようなところは、実際に研修として機能したということもお話としてありました。どういった支援が必要か、どういった取組が必要かというところは、地域の中ではなかなかわからない。どういったらいいのだろうという状況があるとは思いますが、能動的に受信していくこと、自分が必要な情報をとってくるというところは、かなり必要なことではないかという話題もありました。

次の質問としては、行政側で連携していくことを考えていくときに、受入れの担当はあるのでしょうかといった御質問が、行政の方からありました。

山崎さんの御返答としては、基本的にはないということで、業務のコスト感をどういうふうにコントロールするかというのは、課題というか大きなテーマだと思いますけれども、1つの手としては、中間支援でフィルターをかけられるようなノウハウを持っているところに振る、上手く関係性をつくって、上手にボールを投げることであれば、もしかしたら、いいのかもしれないということがありました。

あと話題としては、もう一つ、例えばうちとしては、こういう取組、支援があると助かるということをメニュー化して、言ってしまう、出してしまう。そこで、ある程度フィルターがけをす

ることも1つの手ではないかということがありました。

そういった窓口的なことをある程度意識することで、釜石市の事例の中では、いろいろやってきたこともありまして、例えば巡回員が回るという仕組みの中でも、単純に生存確認だけではなくて、ニーズを察知して、それを所管の部署に投げるという窓口機能を、NP0の中で果たしていたことがありました。なので、ニーズを酌み取るという構造は、行政でも、NP0でも、同じことがあったという話題がありました。

要するに生活環境のサポートのところで、地域の中での自助が生きてきて、生活環境をサポートするところでの行政側の理解というか、関係性があったところは、1つ今回の話合いの中での結論になると思いました。

以上です。（拍手）

○司会：ありがとうございました。続きまして、宮城のグループの秋田さん、お願いします。

○秋田氏：宮城のグループです。こちらのグループでは、大きく2つの質問がありました。

1つ目ですけれども、ここに御参加いただいて、御質問いただいた方の地域もそうですし、東松島もそうなのですが、高齢化率が高い地域でして、今日の発表でもありましたが、社協の手が届かないところを住民がカバーして見守りを行っているということで、どうやって上手い取組が行えるようになったのかという質問がありました。

住民が隣近所を見守れることが一番いいことを前提として、社協ですとか、市の福祉課、大学の先生、難波さんがいた課もそうなのですが、みんなで勉強会をやって、いろんなことをやりたいのだということで話合っていく中で、昨年10月に、地区の方に見守りをしてほしい人は、見守りに回りますからというチラシを配りまして、それを書いてもらいました。

それを配って、1カ月後に回収しますからということで、回収したところ、配った先の92%の方が提出してくれて、残り8%の方については、個人情報だから出さないという方ですとか、若いのでそもそも見守りは要りませんという方だったのですけれども、住民情報としては、今回の調査で、全て把握することができました。そういうことで、情報を集めました。

災害公営住宅については、地元の社協さんは、月2回回っているのですけれども、自力再建された方については回っていないということで、その名簿を基に、あおい地区会で回ろうということで、ただ回るにしても、たくさんあるので、敬老会の入会要件になっている、77歳以上を1つの基準として回らしましょうということで始めました。

月に2回回ることをやってみたのですけれども、中には元気な人もいますので、月1回でいい人と、月2回を回らなければだめな人の仕分けをしました。そうしたら、時間的にも余裕ができたので、お金の話になってしまいますけれども、災害公営住宅を回っている社協さんは復興庁のお金を使って回ってますので、復興庁がなくなったあとも回り続けるのは大変ではないかということもあって、そういったところも見据えて、あおい地区会では自力再建された方の訪問を月1、月2で分けて、月1としたことにより余裕ができたところを、あおい地区会で災害公営住宅も回ってカバーできる

ように、今後を見据えてやっているという話でした。そういった情報も、今後も社協と情報共有しながら、進めていくこととしたいというお話でした。

更に深掘りの質問として、そういった見守りをするに当たっての情報集約のシートはどうなっているかという質問ですか、中にはうちは放っておいてくれという方もいないのですかという質問もありました。

情報集約のシートについては、社協でつくっているものをベースにして、情報収集しています。あおい地区会としては、そういった情報を行政、社協につなぐ役割をしているということで、2カ月に1回、市の福祉課とか、社協へ情報を渡すように、そういったことを考えているということでした。

あと、回っていて断られることについては、まだ始まったばかりなので、そういった事例が余りないのですけれども、適宜行政とも相談しながら、進めていきたいといったお話でした。

大きく2つ目の質問としては、今日も7ヶ所に移転をしたという話があったのですけれども、他の地区は、あおい地区会みたいに上手くいっているのでしょうかという質問だったのですが、あおい地区会と同じやり方でやっている地域はないのですが、他の地域は、他の地域なりに上手く試行錯誤しながらやっているということで、違うやり方でまちづくりを進めているということでした。

この班からは、以上です。（拍手）

○司会：ありがとうございました。最後に福島のグループの齋藤様、よろしくお願いいたします。

○齋藤氏：本日2回目なのですが、一番始めに出た質問は、ふくしま再生の会でいろいろモニタリングをしているのですが、データに国との違いはないのでしょうかという質問が出ました。

当然、違いますと、あっさりとお話しました。国が測定しているものも、全部正しい。何なのかというと、位置が違くと数値が大きく変動する箇所もあるので、位置で数字が違ってくるのです。ふくしま再生の会の特徴としては、場所をきっちりと明確にして、数値を表しています。現在では、土壌や生産物など2万点箇所にも上っているということなのです。

計測は、村も取り組んでおりまして、村が出したデータも、ふくしま再生の会できちっと可視化して、皆さんに伝えています。

菅野さんとしては、誰が測ったのかではなくて、数多くのデータを全て伝えていくのです。どれも正しい数値で、その中で、いかに自分がどの数値と向き合っていくかということはそれを受け取った相手に委ねるので、その数値による影響についての判断どうこうとかは、菅野さんはあえてそういうことは一切やらないと言っています。

正しいデータがいろいろ出てきた中で、埼玉の高校生が体験学習に来るようになりました。昨年は二十数名だったのですが、花を植えて、飯舘村の生産物等も食べて帰ってもらいます。そうしたところ、今年は倍になりまして、43名が来ることになっていて、今回は種まきの体験をしていただくというところまできたのだということで、すごく前向きな実績のお話が出てきました。

そういうことを踏まえると、学生が興味を持ったらすぐに行動を起こしてもらって、送り出して

くれるという社会環境が必要なのではないかとおっしゃっていて、来る勇気を持った人との出会いの大切さを、今、菅野さんは実感しているところでした。

そうしたところで、データなのですけれども、今は東大の先生と取り組んでいるのは、ICTの活用で、遠隔操作でデータを見ることができる、いろんな状態を見ることができるということに取り組んでいて、それがどんどん可能になって、利便性が高まれば、村外にいる人たちも、自分のところの農作物などの管理ができるようになっていくことを目指しています。

そのためには、どの専門家だからとかどの研究家だからということではなくて、自然の生態系にみんなで取り組んでいく、人間の知恵と飯館の力を総合して活かしていくことが、大事だと思っているということでした。

そのデータは、説得力があって素晴らしいですというお話が出たことに対しては、以前、間違っただデータを研究誌に載せて、さもありがたいう形の報告があったそうなのですけれども、本当の姿を見せて、本当の姿のデータを活用することが一番大事なので、間違っただデータが載ることが、残念だというお話をしております。

ここで、総合力で進めたいと菅野さんが強くおっしゃったのですが、その総合力なのですけれども、団体そのものの組み立ては、どうなっているのですかという次の質問が出ました。

こちらは毎週、事務局会議を行っているということなのです。事務局長が東京にいらっしゃるのですが、スカイプでしっかりと欠かさず参加して、その中で役割分担を判断しながらやっているのですが、がちがちに役割分担を固めるのではなく、自発性を重んじて、測定に行きたいところに行くということで、団体の中では、自発性を大事にしているというお話が出ていました。

お互いの分野を縦に割ったり、横に割ったりするのではなくて、一緒にやっていかなければならないことが本当に大事だということは、何度も強調されていました。そのためにも、自分も積極的に取り組むために、今日も出てきていらっしゃるのですけれども、なるべく出ていくようにして、心掛けているということで、今後もますます活発な活動が続くのかというところで終わりました。

以上です。（拍手）

○司会：ありがとうございました。それでは、時間となりましたので、ここで閉めさせていただきますと思います。閉会に当たりまして、檜葉町の復興推進課長の猪狩充弘様から、閉会の御挨拶をいただきます。猪狩様、よろしくお願いいたします。

○猪狩氏：皆さん、こんにちは。御紹介をいただきました、檜葉町復興推進課の猪狩でございます。

本日、復興庁さんの御尽力により、当檜葉町において、このような交流会が開催されることは、非常に感謝すべきものでございます。

さて、檜葉町でございますが、言うまでもなく、原発事故によって全町民が避難をしたまちでございます。しかしながら、震災当時から、我々は帰れることを信じて、避難先の町民の対応であったり、このまちの環境回復、生活環境の整備を町民とともに進めてまいりました。

結果として、震災から4年と半年、冒頭御紹介もありましたが、平成27年9月に避難指示が解除

されて、それから昨年、念願であった学校も再開しております。そして先月でございますが、約10店舗が入る商業施設「ここなら笑店街」ということでオープンして、賑わいも生まれてまいったところでございます。

しかしながら、本日のお話を聞いた中においても、町民それぞれがふるさと檜葉での生活に幸せを感じることができているのか。そういったまちづくりであったり、地域づくりができること、これが本当の原発災害からの復興を成し遂げる重要なポイントだと思ってございます。

したがいまして、皆さんのようなこういった活動は、それを後押ししてくれると思ってございまして、期待をしているところでございます。

檜葉町は、復興道半ばでございます。引き続きの御支援をお願い申し上げまして、閉会の挨拶とさせていただきます。本当に御苦労さまでございました。（拍手）

○司会：どうもありがとうございました。以上をもちまして、閉会とさせていただきます。

お配りしております、アンケートにつきましては、次回の参考とさせていただきますので、御協力をお願いいたします。係員が回収に回らせていただきますとともに、本研修室の出入り口、受付のところに回収箱を設置していますので、お帰りの際に、御提出をお願いいたします。

それから、お帰りの際には、名札ケースも返却いただきますようお願いいたします。次回以降の交流会につきましては、事務局からの案内を希望される方は、名刺を入れたまま御返却をお願いいたします。

閉会后、登壇者とより気軽にお話ができるように、少し時間をとってございますので、引き続き、交流を深めていただければと思います。

本日はお忙しい中、お集まりくださいまして誠にありがとうございました。